

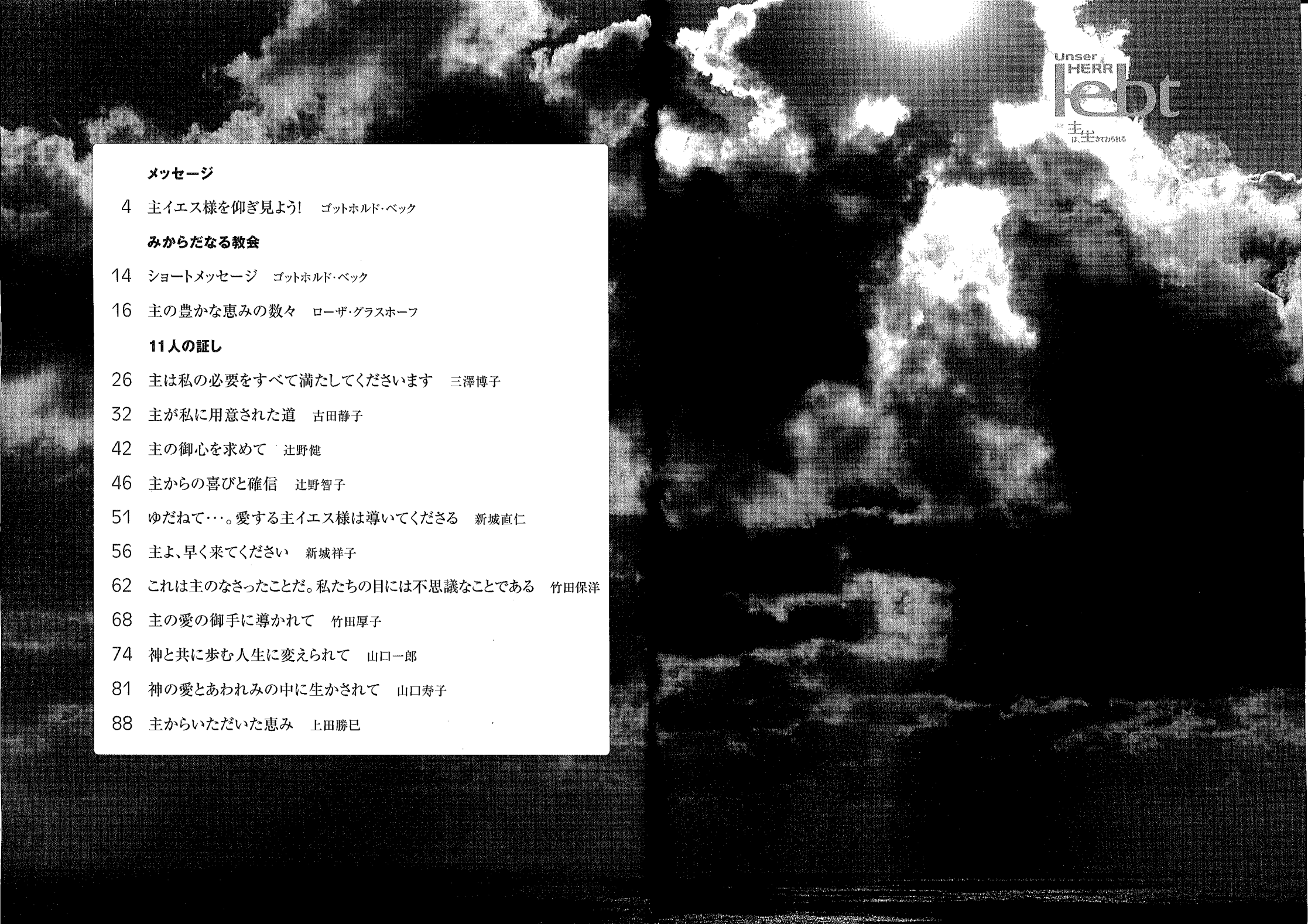
2014
graph magazine vol.31

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.31 定価100円（本体95円）



メッセージ

4 主イエス様を仰ぎ見よう! ゴットホルド・ベック

みからだなる教会

14 ショートメッセージ ゴットホルド・ベック

16 主の豊かな恵みの数々 ローザ・グラスホーフ

11人の証し

26 主は私の必要をすべて満たしてくださいます 三澤博子

32 主が私に用意された道 古田静子

42 主の御心を求めて 辻野健

46 主からの喜びと確信 辻野智子

51 ゆだねて・・・。愛する主イエス様は導いてくださる 新城直仁

56 主よ、早く来てください 新城祥子

62 これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである 竹田保洋

68 主の愛の御手に導かれて 竹田厚子

74 神と共に歩む人生に変えられて 山口一郎

81 神の愛とあわれみの中に生かされて 山口寿子

88 主からいただいた恵み 上田勝巳

主イエス様を仰ぎ見よう！

ゴットホルド・ベック

あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ。あなたの足の道筋に心を配り、あなたのすべての道を堅く定めよ。右にも左にもそれてはならない。あなたの足を悪から遠ざけよ。（箴言　4・25～27）

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。

（ヨハネ　6・40）

私たちは主イエス様の一方的な愛と恵みによって、「褒美」を得るようにと救われました。聖書全体は私たちがこの目標に達するための道を教えています。とりわけ「ヘブル人への手紙」の著者は、救われた兄弟姉妹たちが常に前進するよう教え、要求しています。また、必ず目標に達することも約束しています。

主イエス様ご自身が、この道を先に歩まれ、今は想像をはるかに超えた栄光のうちにおられます。イエス様は身を低くし、私たちのあらゆる悩み、苦しみをなめられ、勝利を得て、父の栄光のうちに引き上げられました。ですから私たちも、そこに至ることができるという確信を持つことができます。これを説明するために、「ヘブル人への手紙」の著者は一つのたとえをもって語っています。

港の近くで一艘の船が嵐にあい、危機に瀕しているとします。乗船者たちは不安になりますが、勇敢なひとりの船員が船の錨を港に投げ入れることができました。すると錨が安全な港に下ろされたという安心感から、乗船者たちの不安は消え去ります。これと同じように、「教会の頭」である主イエス様がすでに天の御国に入られましたから、その肢体である私たちも御国に入る確信を持つことができるのです。

この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側にはいるのです。イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となられました。

（ヘブル　6・19～20）

私たちは、主の救いのご目的を、達成できる確信があるでしょうか。実は、聖書には私たちがこの目的を「達成できないかもしれない」という悲しい可能性も書かれています。私たちは救われて永遠のいのちを持っていますから、これを失うことはありません。しかし、救われた目的を達成できず、褒美をもらえない可能性もあるのです。私たちの生活はこの意味で成功しているでしょうか。それとも失敗しているのでしょうか。失敗するか成功するかは、私たちがいつも何を見ているかによって決まります。他のものに目をとめず、主イエス様だけを見上げることはとても大切です。

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

（ヘブル　12・1～2）

1　他のものに目を留める危険性

はじめに、五つの間違った見方について考えてみます。

第一は「後ろを振り返ること」です。

するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけ

主イエス様を仰ぎ見よう！

てから、うしろを見る者は神の国にふさわしくありません。」
（ルカ　9・62）

これは旧約聖書に何度も出てくる、イスラエルの民が実際に陥った過ちです。

彼らはくり返して、神を試み、イスラエルの聖なる方を痛めた。
（詩篇　78・41）

なぜ、イスラエルの民は目前に広がるカナンの地に入れず、荒野で四十年もの間さまよい続けたのでしょうか。なぜ彼らの間に、実りがなく、勝利、喜び、安らぎ、賛美とまた感謝がなかったのでしょうか。彼らが後ろを振り向いたからです。

救われた兄弟姉妹に対してパウロが感じていた大きな重荷も、信徒たちが後ろを振り向く、ということでした。そのためパウロは「ガラテヤ人への手紙」を書いたのです。主イエス・キリストを信じたガラテヤの信徒たちは、後ろを振り向き始めていました。それは、この世の考え方に戻る、無神論に帰る、また主イエス様を捨てるということではありませんでしたが、冷たくいのちのない律法的なユダヤ教に立ち返ることを意味していました。ユダヤ教の信者たちが、主イエス様の恵みに与った兄弟姉妹たちに、ユダヤ教に帰依することを勧めていたのです。

主イエス・キリストの恵みによって救われた兄弟姉妹は、主イエス様の満たしに与るために召された者です。もし、いのちのないユダヤ教に立ち返ったとしたら、決してこの満たしには与れなかったことでしょう。彼らの信仰は、主のみこころにかなった霊的生活とは遠くかけ離れたものになったでしょう。

当時のガラテヤの信者たちは、後ろを振り返り、少しも前進する様子がありませんでした。その場に立ち止まったままだったのです。兄弟姉妹たちが内面的に前進するか、または霊的に退くかは大きな問題でした。彼らが後ろを振り向かずに前進することがパウロの心からの願いであり、祈りであったので、パウロはこのことについて書いたのです。

では、私たちはどうでしょうか。後ろを見ていませんか。後ろを振り向くと、疑いが起こり、悪魔が勝利を握ります。後ろを振り向くたびに主イエス様を否認していることになるのです。ただ、前方を見つめて進みましょう。

二番目の間違った見方とは、

「不安そうに辺りを見回すこと」です。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。
（イザヤ　41・10）

原語聖書のこの個所には「不安そうに辺りを見回すことなかれ！」ということばがあります。日本語の訳では「恐れるな」、「たじろぐな」となっていますが、私たちはなんとしばしば、恐れと不安をもって周囲を見回すことでしょうか。

ペテロは不安気に、辺りを見回した一人でした。波の上を歩いていたのに、イエス様から目を離し、辺りを見回した途端、波の中に沈み始めました。見るところを間違えたときに、沈み始めました。

すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」
（マタイ　14・28～31）

旧約聖書を見ると、イスラエルの民も同じく、不安気に辺りを見回したことが分かります。エジプトから出て、神様の約束の地カナンの近くで宿営した彼らは、十二人の斥候がカナンの地をのぞき見てきた報告を聞きました。斥候のうちの十人は不安気に辺りを見回し、カナンの地の堅い要塞とそこ

主イエス様を仰ぎ見よう！

に住む巨人だけを見て恐れましたが、残る二人だけが、ただ、主を見上げていました。イスラエルの民は恐れおののいた十人に従ったため、結局カナンの地に入ることはできず、後にカナンの地に入れたのは先の二人だけでした。(民数記13、14章)

決して不安そうに辺りを見回してはいけません。主は私たちを救ってくださいました。その主が、ずっと私たちを導き続けて来られたのです。困難や苦しみは、確かにあることです。しかし患難や苦しみに縛られて、主に従えない、というようなことにならないようにしましょう。「あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ」(箴言4・25)と聖書は教えています。

第三の間違った見方とは、

「近視眼的にものを見ること」です。

あなたがたは、うわべのことだけを見ています。もし自分はキリストに属する者だと確信している人がいるなら、その人は、自分がキリストに属しているように、私たちもまたキリストに属しているということを、もう一度、自分でよく考えなさい。(2コリント　10・7)

私たちはときどき、自分が抱えている「悩みだけ」を見て、直面している問題だけに支配されてしまいます。もし私たちが、周りの問題だけを近視眼的に見てしまうなら、決して主のご目的を達成することができません。このような「限られた視野」しか持てないと、主の栄光を奪ってしまう結果となります。

私たちは目の前のものを見て、「もうだめだ」と考えがちです。この近視眼的見方は、私たちの大きな弱点です。私たちには、確かに苦しみや問題はあるでしょうが、だからと言ってそれでおしまいなのではありません。周りにあるそれらの問題は、私たちの前進を妨げるものであり、「いっさいの重荷とまつわりつく罪」(ヘブル　12・1)を意味します。今ある問題が、重荷のように私たちの上にのしかかり、私たちはもうだめだと思っているかもしれません。これこそ、私たちにまつわりついている罪です。近視眼的な見方は、なんという危険、悩み、

妨げとなることでしょう。霊の目であなたの前をまっすぐに見てください。「イエスから目を離さないでいなさい」(ヘブル12・2)と聖書は言っています。

今の悩みが重要なのではありません。目に見えない霊的な現実こそが、目に見えることがらよりも現実的な問題とならなければいけません。患難に閉じ込められてしまってはいけません。困難は決して尽きることがありません。けれども、私たちの「腹痛のような問題」は重要ではありません。主イエス様の御苦しみこそが、最大の問題です。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。　(1ペテロ　4・12〜13)

四つ目の間違った見方は、

「自分勝手なものの見方」です。

自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

(ピリピ　2・4〜5)

自分のことしか顧みない、というのは自分勝手な態度です。イエス様に救われた者として、利己的な生活をすることは許されません。主イエス・キリストの肢体として、主イエス様から目をそらしている兄弟や、罪に沈んでいる姉妹に対して、私たちは責任を持っています。「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい」というみことばは、何を意味しているのでしょうか。何か一つの問題がある場合、それが自分にどんな影響を及ぼすかを考える必要はありません。人間には、自分に害が及びさえしなければそれでよい、とす

主イエス様を仰ぎ見よう!

る考えが往々にしてあります。しかしもし、集会の兄弟姉妹が、悩みに遭っていたり、あるいは意識して主イエス様に不従順であり、また主から目をそらして他のものを見ているとしたら、私たちは無関心でいられるでしょうか。自分のことだけを顧みていてはいけません。自分のことにしか関心を持たず、自分にだけ意を用いる考え方は誤ったものの見方です。自分だけを顧みることは、自分を不幸にする一番の早道だと言わなければなりません。

五つ目にあげる間違った見方は、

「自己分析すること」です。

パウロは書簡の中で、このようなことを行わないように警告を与えています。自分の内側に目を留めていると、霊的な行き詰まりをきたします。

なぜ私たちは自分自身の内側を見つめるのでしょうか。自分の内に主イエス様を満足させるものがあると考えているためでしょうか。自分を見ることによって、自分を喜ばせたいと思っているのでしょうか。どちらにしろ、自分自身だけ見つめると、不幸になり、また絶望する結果となります。私たちのうちには何の良いところもありません。このことは知る必要があります。私たちの内に良いことを期待するのをやめましょう。「あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ」（箴言　4・25）。主イエス様から目を離さないでいなさい。

ここまで「後ろを振り返ること」、「周りを不安そうに見回すこと」、「近視眼的に見ること」、「自分だけを顧みること」、「自己分析すること」が間違った見方であることを考えてきました。次は、主だけをまっすぐに見つめる祝福について見てみましょう。

2　主を仰ぎ見る祝福

私たちが何を見るかは、非常に大切な問題です。「ヘブル人への手紙」の著者は、神の子どもに与えられた特権に目を留めることの大切さを教え、まとめとして「主イエスから目を離さないで」と書いたのです。「主イエスから目を離さないでいなさい」ということばの原語を見ると、「他のものから目をそらし、イエスだけを見よ」という意味が含まれています。過ぎ去った方を振り向かず、私たちを取り巻いている事柄に目を奪われないでいることです。目前にある悩みに目を向けず、また、自分自身を見つめないで、ただ主イエス様だけを見ましょう。主は、「あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ」と言っておられます。

私たちは人生の目的をどこにおいているでしょうか。目はどこに向けられているでしょうか。天的なものに向けられているでしょうか。それとも地的なもの、この世的なものに向けられているのでしょうか。私たちの目が天的なものに向けられているならば、それは信仰の前進の原動力となります。霊的成長の秘訣は天に目を向けることです。

「あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ」というみことばは、何を語ろうとしているのでしょうか。主なる神のみこころ、主のご目的が何であるかをみことばと御霊によって教えていただきましょう。主のみこころそのものを教えていただき、私たちの全生涯を、主のみこころと主のご目的に適うようにしていただきたいものです。

主イエス・キリストを仰ぎ見る人は、主のご目的を見ることができます。けれどももし、私たちが主のご目的ではなく自分の目的を目の前に置くならば、私たちの生涯は失敗に帰し、主のご目的を達成することができず、褒美に与ることもできないでしょう。主のご目的は、目に見えるものではなく、永遠のものです。

> 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。
>
> （2コリント　4・17）

私たちは、永遠へ連なるものを見ているでしょうか。私たちの生涯は主である神のご目的に適っているでしょうか。悪魔は私たちが主の目的に達しないように、また私たちが地的なもので縛られるように、そして私たちが世的な目的を追い求めるよう

主イエス様を仰ぎ見よう！

にとあらゆる画策をしています。悪魔がしばしば私たちを、主のご目的からはずれたことに興味を持つように仕向け、麻痺した状態に陥れることは私たちの経験するところです。

私たちの生涯が、主のご目的とみこころに合致するよう祈り求めましょう。

もしいま、対人関係に縛られ、自分でどうしたらよいか分からないでいるなら、主のご目的を考え、主イエス様を仰ぎ見ましょう。もし私たちが悩んでいる対人関係が主のご目的を達成することを妨げているならば、その関係を速やかに断ち切らなければいけません。

私たちは、未来の出来事には見当がつかないものです。それなら主なる神のご目的を深く考え、主イエス様をまっすぐに高く見上げようではありませんか。

将来どこで、どのようにして働き、また奉仕したらよいか、まったく見当がつかないかも知れません。だったら、主イエス様を仰ぎ見ましょう。

「あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ」のみことばは、「あなたの全生涯をすべて、わが心に合わせよ」という主のみこころを意味しています。あなたは、どうしていいか分からないような悩みを持っているかもしれません。しかしこの問題を解決するために、まず、どうしたら主のみこころに適い、主のみこころを全うすることができるかをよくお考えになってください。自分の悩みではなく、主のご目的を見つめてください。あらゆる悩み、困難、苦しみ、を鋤(すき)として、主イエス様を仰ぎみてください。その時、あなたの目の前に新たな希望が生じてきます。私たちの全生涯が、主のご目的と完全に一致させられるよう祈り求めましょう。

私たちは主のご目的が何であるかを知っているでしょうか。主のからだなる教会が、父なる神にとっていかに重要なものであるか、私たちは知り得たのでしょうか。花婿なる主イエス様が花嫁である教会をどんなに愛し、恋い慕っていることか知っているのでしょうか。

悩みは、確かにあります。未解決の問題は山積しています。困難は続いています。また悪魔は「お前の目指す目標は高すぎる。この程度で満足せよ」とささやきます。私たちはそこで満足していてよいものでしょうか。それで満足しているならば、わざわいです。聖書に主のみこころが記されています。

これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、私たちの主キリスト・イエスにおいて実現された神の永遠のご計画に沿ったことです。（エペソ　3・10～11）

主イエス様を仰ぎ見るべきです。他のものから目をそらし、主イエス様だけを見ましょう。悪魔は、イエス様にこの世の富のすべてを示し、提供すると言いましたが、イエス様はそれを断固として退け、主である神の目的に目を留め、ひたすらに前進なさったではありませんか。悪魔は、主イエス様が十字架にかからないように、この世のいっさいの権力と栄光をイエス様に提供しようとしたのです。しかし、主イエス様の目は、ひたすらに前を見つめていたのです。

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。（ヘブル　12・1～2）

主イエス様は、父なる神のご目的だけを思っておられました。私たちはどうでしょうか。私たちも、主イエス様を高く、高く仰ぎ見ようではありませんか。

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。（詩篇　16・8～9）

主イエス様を仰ぎ見よう！

みからだなる教会

ゴットホルド・ベック

このメッセージは、ベック兄が一九五六年に那珂湊で執筆されたものです

私たちの伝道活動の目的が、主イエス様のご目的と一致しているかどうかは、極めて重大な問題です。その時代、私たちの主は、ご自身の計画について何の疑問も抱いてはおられませんでした。すなわち私たちの主には、無目的や不確実さといったものがいっさい見出されなかったのです。このご目的に従って主は死に向かわれ、よみがえられ、そして、今日もなおご栄光のうちに父なる神の右に座しておられます。それは休息ではなくて働かれるためであり、主はこのご目的を達成するためにご自身の御霊を注がれました。「わたしは、わたしの教会を建てます」。これこそが主のご目的であります。

私たちが主の働きを妨げたくないと望むならば、しみもしわもなく、そのようなものの何一つない、聖（きよ）く傷のないものとなった栄光の教会、そのような教会こそが私たちの伝道活動の目的となるべきです。当時、主イエス様と御霊のご目的がこのことであったことを、悪魔も信じておりました。そうでなければ、悪魔がこのご目的に強烈に抵抗するようなことはしなかったはずです。

主によって教会の奥義に目が開かれた者たちは、非常に激しい攻撃にさらされました。あらゆるところで彼らは兄弟によってさえも惑わされてしまいました。

悪魔は事の重要性をしっかり認識しておりました。それに引き換え私たちはどうでしょうか？私たちは悪魔とその軍勢と同じほどに事態を真剣に受け止めているでしょうか？すべての活動や奉仕に当たって私たちが目指す目的とは、一体何なのでしょうか？主のご目的をはっきりと認識していなければ、私たちはさまざまな奉仕活動の中で自分自身を見失い、次善の目的で満足してしまうことにもなりかねません。

だいぶ前のことですけど、信仰を持った一人の姉妹に那珂湊でお会いした時、彼女は「私はエペソ書1章22～23節が大好きです」と、目を輝かせて話してくれました。このことを知って、私は本当に嬉しくなりました。そこには次のように書かれています。

> また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・22～23）

このような主の教会がなければ主イエス様は「不完全」なのです。主イエス様は、ご自身が完全になるために私たちを必要としておられるのです。ですから教会は、イエス様ご自身であり、主のみからだそのものなのです。

「からだのないかしら」とは、どんなものでしょうか？「枝のないぶどうの木」とは、一体どのようなものでしょうか？言い換えれば、今日大切なことは、福音が宣べ伝えられて人々が信仰を持つようになるだけではなくて、信仰を持った人々がイエス様のご支配の下に置かれ、その生活を通してイエス様の支配、力、栄光が現されることにほかなりません。主は、そのご目的に向かって私たち全員の目を開くことがおできになっているでしょうか？この点について、私たちがまだ暗中模索の状態にいるとすれば、それは致命的と言えます。もしもお手伝いさんにパンを買って来なさい、と頼んだのに洗濯を始めたり、昼食を命じたのに庭の草むしりを始めたとしたら、たとえ彼女がその仕事に全力で取り組んだとしても私たちは不満に思うに違いありません。御国における神様の働きについても多分に同じことが言えます。

「しみやしわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会」、それこそが私たちの目指す目的であるべきです。「しみがない」とは、もはや罪の片鱗すら

も見られないことであり、「しわがない」とは、老齢や、失われた時間、心配と苦悩を表すもの一切が消失したことを意味するのです。また、「傷がない」とは、もはや悪魔や悪霊が私たちを訴える理由がすべてなくなってしまったことを意味しています。

御霊によって覚醒された使徒は、私たちに対して次のように呼びかけています。

それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

（エペソ　4・12〜13）

私たちはもはや子どもではなく、成長しなければならないのです。

主の豊かな恵みの数々

ローザ・グラスホーフ



あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

（箴言　3・6）

「遠く離れた日本に、本当に一人でも行くつもりなんだね」と義理の息子は言って、私に日本の慣習についての本をくれました。この本を読み通す時間はありませんでしたが、主にある兄弟姉妹のところに行くのだから、彼らの行動をまねれば十分だろう、と考えました。私は長時間のフライト用に、教会とそのかしらであるキリストとの関係について書かれた「キリストのみからだの完成」という本を持参しました。この本を持ってきたのは、まさしく主ご自身の導きによるものだった、と後で知ることになりました。



ローザさんを囲んで

1　御代田にて

成田空港では、三人の姉妹たちが待っていてくださいました。その時、私ははるか遠く離れた地にたどりついたというよりは、我が家に戻ってきたような安らぎを覚えました。長らく文通だけになっていた、愛する姉妹たちとの再会は、ただただ嬉しい限りでした。

成田から御代田に直行し、ゴールデンウィークの間、七百人ほどの兄弟姉妹と共に喜びの集いに参加させていただきました。以前、ドイツ喜びの集いでお会いした多くの兄弟姉妹方と再会し、皆さんの愛をひしひしと感じとることができた幸いを主に感謝しました。「きっと天国とはこのような所に違いない。神の子どもたちは誰でも歓迎され、あたたかく受け入れられる。主イエス様をご自分の人生に受け入れた人たちはみな、主のみもとに集まり、主のみことばを聞くことができるのだ」と、その時思ったのです。

御代田では、友人の姉妹の別荘に泊まらせていただきました。そこにドイツ語の堪能な姉妹も加わってくださり、三人で

過ごすことになりました。生活面では、ほとんどのことがドイツと同じで、ただ見たことを真似するだけで済みました。私は、次のみことばを思い出しました。

私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。（1コリント　11・1）

三人で、時には子供のように笑いころげながら、喜びに満ちた時を分かち合うことができました。お互いを理解する上で、英語という共通語も大いに役立ちましたが、何と言っても主から与えられた聖霊が、私たちをキリストにあって一つとしてくださいました。

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。（ローマ　8・14〜16）

主は、最初の日の朝、このみことばを与えてくださり、私はとても励まされました。ですから、是非、このみことばを二人の姉妹たちと共有したいと考えたのです。それから毎朝、主が私に何を語られたのかを姉妹方と共に味わうことができました。「主よ。お話しください。しもべは聞いております」（1サムエル3・9）と、私たちが期待を込めて祈ると、主は必ずお語りになり、私たちの心に触れてくださいました。

二日目からは、食事を福音センターでとりました。姉妹方が、お台所や食堂で楽しそうに、熱心に働いておられる光景を見て、私はとても驚きました。お互いの仕事ぶりを見ながら協力し合って、まるで時計の歯車が刻まれるように、着々と進められていくのです。「ここではどなたがすべてを組織しておられるのですか」と私が尋ねると、次のような答えが返ってきました。「ここには組織などありません。私たちは、一つの有機体であって、イエス様がそのかしらなのですよ」と。正直言ってドイツでは、このような方法を実践的に試みたことはありません。

参加者がどんどん増えていくにつれて、私は蟻塚の中にいる蟻のように感じてきました。めいめいが何かに一生懸命になっているように見えました。私の心に印象深かった点は、ドイツで経験できないような、お互いに補い合う秩序がその場にあったことでした。まさにこの雰囲気が、私を遠足の昼食のサンドウィッチ作りに駆り立てることになりました。指示や説明があまりない中でサンドウィッチ作りが行われましたが、私はなんの不安もなしに姉妹たちと一緒にいる幸せを満喫したのでした。その時、次のみことばを思いだしました。

私たちが、どのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。（1テサロニケ　1・9〜10）

それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。（1ペテロ　4・10）

御代田で兄弟姉妹たちと共に過ごすうちに、これらのみことばのいのちで満たされただけでなく、次のエペソ書のみことばが、まさしく真理として体験できました。

キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ　4・16）

そこでお聞きしたことは、この真理の重要性をベックご兄姉が認識され、今日までずっと大切にしてこられたということでした。「キリストは教会のかしらであり、ご自身の血潮によって買い取られた私たちが、そのみからだを構成する各器官なのです。イエス・

みからだなる教会

キリストは、ご自身の教会を計画され、基礎を造られ、お建てになり、確固たるものにされ、完成なさって、栄光を帰されるのです。そして、このすべてはご自身のご栄光のためなのです」と。

姉妹たちは、さらに次のように話してくださいました。「悪魔が主の働きを邪魔したり、壊そうとしたりすることが度々あります。しかし、ベックご兄姉は、それらの攻撃をすべて主イエス様に委ねておられます。私たちは、そのみからだの器官としてイエス様と密接につながっているのですよ」と。

ドイツにおいても、喜びの集いに関わる時、私たちは、さまざまな問題にぶつかります。それはまさに光と闇との戦いです。長年、その責任者を務めて来られた兄弟は次のように仰(おっしゃ)いました。「もしも私たちが悪魔の攻撃にさらされたら、大いに喜ぼうではありませんか。なぜなら、私たちの奉仕が生ぬるければ、サタンは寝ているに違いないのですから」と。私は、サタンの攻撃にさらされるたびに、いつもこの兄弟のことばを思い出します。

御代田のコンサートで私が一番驚いたのは、「ヘンデルのハレルヤ・コーラスには、飛び入り歓迎です」と言われたことでした。私は、耳を疑いました。もしも誰かが大声で間違って歌ったらどうするのだろう、と思わずにはいられませんでした。ドイツだったら、このようなリスクは絶対に犯しません。けれども、そこで私は気がついたのです。完全な支配者であられるお方に主導権を明け渡す時、私たちの魂は、何と自由と喜びで満たされることだろう、と。

日本でいただいたハレルヤ・コーラスのCDを、ドイツに帰ってからお招きした方々にお聞かせしつつ、今の話をご紹介すると、誰もが信じられずに目を丸くしました。その時の写真をお見せすると、ますます驚かれましたが、そのうちに疑いは消えて、静かな希望に変わって行ったのです。私たちは一人では何もできませんが、キリストと共に、また、キリストを通して、それぞれの器官が協力しあうことによって、不可能が可能となります。それは主ご自身が、ご自分の栄光のために、その願いを実現されるからです。あらゆる体験を通して、私はピリピ書の次のみことばを思い出しました。

私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。

（ピリピ　2・2）

「心を合わせ、志を一つにする」ということは、音楽で言えばいろんな音が一緒に鳴り響くことによって調和が生み出される、ということではないでしょうか。さまざまな音が、主にあって鳴り響くことで、調和が生まれるのです。

この証しを書いていると、主が日本の兄弟姉妹に注いでおられる祝福を覚えて私の心は打ち震えています。なぜなら兄弟姉妹たちは、「教会のかしらが推進力とならなければ、そのみからだは機能しない。各器官がそのかしらにだけ依存することこそが重要である」ということをどなたもご存じだからです。

御代田では、二つの結婚式にも招待されました。ここでも姉妹たちの熱心で、調和のとれた協力を見て、ただただ驚きました。この協力態勢がなければ、きっとスケジュールはこなせなかったに違いありません。この日、七百人が昼食をとりましたが、一度には食堂に収容できないので昼食は二交代制となりました。そのわずか三時間後に、同じ場所で、四百二十人もの招待客の披露茶話会が開かれたのです。私自身、メットマン集会でハウスマザーとして働いているので、このような仕事がいかに大変かを良く知っています。しかし、責任者である愛する姉妹は、集会のかしらである主イエス様がすべての助け手を備えてくださるという確信を持って、喜びと超人間的な安らぎに満ちて輝いていたのです。私は彼女のことをいつも思い出しています。

彼女にとって最も大切なことは、自分が祈るだけではなく、だれにでも祈ってください、と声をかけることでした。メットマン集会の姉妹たちにこのことを話すと、皆、そんなことは想像できませんでした。確かに私たち自身もマタイ伝の次のみことばを知ってはいます。

それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。

（マタイ　19・26）

しかし、そのように自分を主に明け渡し、主の導きを体験した人はほとんどいません。ベックご兄姉が、この真理を信頼し続ける生きた模範となっておられることは幸いです。私自身は、同じような状況の中で次のように思わされてきました。「私は、自分

みからだなる教会

の能力と経験か、それとも私の救い主である主か、一体そのどちらを信頼しているのかしら」と。結婚する若い二人にとって最も大事な願いとは、主の恵み、ご愛、真実を証しすることであり、結婚した日から二人で主に仕えるということでした。結婚式の主役は、新郎新婦ではなくて、主イエス様ご自身だったのです。新郎新婦のお証しを通して、主が多くの人々に直接お語りになることができました。招待された方々の多くは、そのような状況下でなければ、きっと聞く耳を持たない人たちだったことでしょう。

喜びの集いの最後に皆でスリッパ拭きをしている中に、結婚したばかりの新郎を見かけました。彼は、美しい新妻ばかりでなく、主イエス様のためのご奉仕もしっかりと見据えていたのです。この時、示されたみことばは詩篇でした。

喜びをもって主に仕えよ。（詩篇　100・2）

玄関ホールのじゅうたんの上に老若男女が一列に並んで座り、山盛りに積んだスリッパを全員で洗う光景は、ドイツ人の私には驚きと感嘆しかありませんでした。私は思わずこの共同作業の写真を何枚も撮ってしまいました。福音センターの地下室も見せていただきましたが、足の踏み場もないぐらい、びっしりと寝袋が敷き詰められているのには大変驚きました。この光景の中にもまた、私たちの救い主に対する初めの愛が輝いていました。大切なのは居心地の良さではなく、兄弟姉妹とのお交わりであり、同じ信仰の土台に立って励まし合い、強め合うことなのです。

私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。というよりも、あなたがたの間にいて、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。（ローマ　1・11〜12）

ある日の午後、姉妹方のお交わり会に招かれました。たくさんの姉妹が、各自の生活において主がどんなに素晴らしいお働きをされたか、という体験を分かち合うために集まっていました。話題の中心は、救い主のご愛と慈しみでした。飢え渇いた魂に、救いの泉からわき出る水を飲む機会が備えられていたのです。私は通訳なしには何も分かりませんでしたが、今でもこの時の話をすると、その場の愛に満ちた雰囲気が心に蘇ってくるのです。

もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。（ヨハネ　13・35）

また、ある日の午後、英語の上手な二人の姉妹が福音センターの近辺を案内してくださいました。主イエス様に対するお互いの信仰の話を共有する時間となり、これも私にとって忘れがたい体験でした。時はまたたく間に過ぎて、御代田にお別れを告げることになりました。日本行きの飛行機の中で、私はキリストのみからだの完成について本を読みました。しかし、この真理を、日本滞在中に目で見ることができ、理解を深めることができました。このことを心から主に感謝しつつ、日本に於ける主の偉大な御業のために祈らせていただけるのは、私にとって大きな恵みであり、特権です。

2　東京にて

東京での滞在に関するいっさいのことは、来日前にすでに整えられていました。ホテルも朝食も予約され、日々の計画も立てられていました。私は何の心配もなく、ただお任せするだけで、まるで女王様以上の待遇でした。

愛する兄弟姉妹たちが、ご家庭で集会を開いてくださり、皆さんと再会することができ、暖かいおもてなしを受けました。私の誕生日には小さなお祝い会をしてくださり、ケーキまで準備されていました。家ではこんなにたくさんのバースデープレゼントを貰ったことがなかったので、これは私にとって大きな喜びでした。ほかの集会でも、記念のみことばが添えられた贈り物をたくさんいただきました。いただいた写真やみことばのカードをアルバムで見るたびに、日本での思い出が生き生きとよみがえってきます。

家庭集会に招かれた時、特にびっくりすることがありました。皆さんが一時間以上も床に座り続けて、しかも何と二人当たり五十センチ四方ほどのスペースに収まっておられたのです。ただ驚くばかりでした。この方法なら、大勢の人がどんどん集

みからだなる教会

まって来ても詰め合って座ればいいのですから、誰でも歓迎されるわけです。そこではベック兄が福音メッセージをお語りになった後、個人的なお証しによって生きた信仰が伝えられました。そして共に信仰の歌を心を込めて歌い、時にはソロやデュエットでの賛美もなされて、心が感動して嬉しくなるのでした。

皆が、救い主なる主につながっている事実を感じると共に、この集いが主に在って一つの大きな家族なのだ、という実感がひしひしと湧いてくるのを覚えました。まさしく「イエス・キリストが師であり、私たちが彼の弟子」なのです。そして日本でもやはり「愛情は胃袋を通して伝わる」ということがよく分かるように、集会の後半には食べきれなくて残念なほど、たくさんの御馳走が出てきたのでした。

吉祥寺にあるパン屋さんの「リンデ」でも何回か食事しました。そこではドイツのパンが味わえるだけでなく、いのちのパンをも知ることができます。店を訪れる様々な人たちに対し、このような方法で福音を宣べ伝える機会が与えられています。私もこのような働きができるようにと、自分でも一生懸命に祈り続けています。空腹を覚えてそこに来たところ、思いがけず霊的な飢え渇きまでも満たされた、という体験をした人々と、天国で会えることを今から楽しみにしています。

夕食の時にも兄弟姉妹たちとの楽しいお交わりが、いつも与えられました。私がご奉仕で関わっている子供や若者たちのこと、また刑務所訪問についてもいろいろと話を聞いてくださいました。兄弟姉妹の皆さんが、私の奉仕活動のためにも祈っていてくださることに大変励まされています。そのようなとりなしのお祈りを必要としています。

お葬儀にも参列させていただき、主の許に召された四十四歳の娘さんの母親のお証しを聞くことができました。娘さんの生涯と召されるまでの日々について、はっきりとした喜びに満ちた声で話しをされました。娘さんの最後の旅にはどの洋服を着るかを、二人で話し合ったそうです。娘さんの願いは、ウェディング・ドレスを着ることでした。子羊の婚姻に招かれているのだからでした。ドイツに帰ってから日本について話す時、私にとって印象深いこのお証しのことをいつも伝えています。天国を先取りした喜びと、娘さんに必ず再会できるという確信は、すべての悲しみを超越していました。この体験は、私たちの人生のあらゆる状況において、主イエス様への信仰を持ち続けるために確実な錨（いかり）であることを証明しています。

別れの日は、あまりにも早く訪れました。ハイデローゼさんとご主人のクリストフさんと私のために集会所でお別れ会を開いてくださいました。再び愛をこめて作られたたくさんの御馳走が並べられていました。遅くなればなるほど、仕事帰りの兄弟たちも加わって、会場は兄弟姉妹たちで一杯になりました。ここでもバイオリンとフルートのミニコンサートがありました。神様から与えられた賜物を用いて、主イエス様と兄弟姉妹たちを喜ばせたいという心構えは、すばらしいと思わされました。私もぜひ見習いたいものだと思いました。

日本への旅で私の心に深く刻まれた印象を、次のみことばで表したいと思います。そして、これをお読みいただいている皆様が、特別に主が与えておられる恵みの中でこれからも走り続けられますように、お祈りしています。

ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。

（2コリント　9・7～8）

みからだなる教会

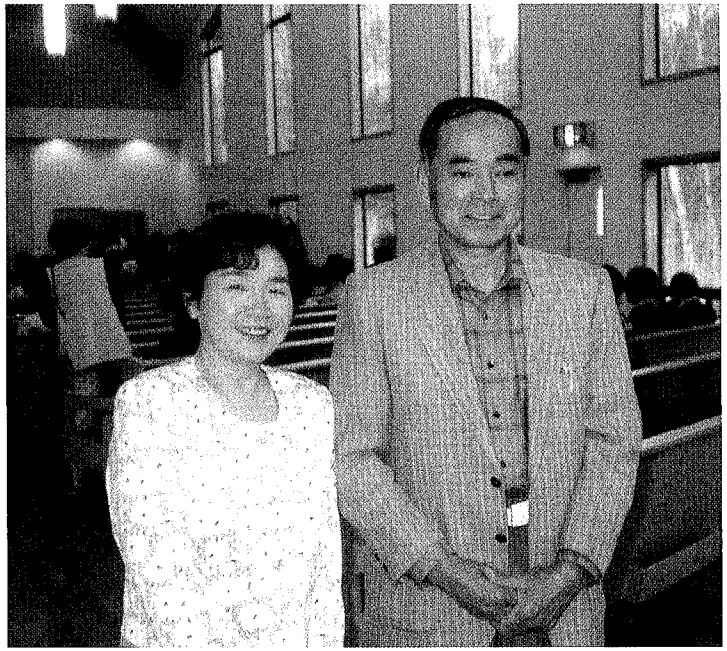
ローザ・グラスホーフ／一九五二年、ドイツ、デュースブルグ市に生まれる。専門学校で運送業を学び、ケルン・ボン空港の運送会社、デュッセルドルフのサベーナ航空会社勤務、一九七七年、結婚。一九八七年からメットマン集会のハウスマザーとして働き始め、現在に至る。メットマン集会の子ども及び青少年の会の指導者も務める。二〇〇四年以降、女性刑務所の訪問伝道も行っている。子どもは二男一女（ユルグ、ミヒャエラ、アレックス）、孫は七人



ドイツの子供会の生徒達と

主は私の必要をすべて満たしてくださいます

三澤　博子



夫の正雄さんと

私は一九四三年満州の大虎山で生まれました。父は国鉄に勤務しておりましたが、二十歳後半、若い情熱にかき立てられて南満州鉄道の機関区に移りました。終戦後、私が二歳の時、両親と姉四人で帰国、父の勤務の関係で、学校と住居を転々としました。転校するたびに、友達に早く気に入られたいと、人の顔色をうかがい、うわべをつくろうような子どもでした

父は大変厳しい人でしたが、両親は深い愛情を注いで大切に育ててくれました。当時（六十年ほど前）、航空自衛隊浜松基地にアメリカ空軍のパイロット達が派遣されていました。私の家の垣根から一メートルほど離れた敷地にパイロットとその家族が住む住宅三十軒と、子どもたちが通う小さなアメリカンスクールがありました。小学四年生だった私は、英語もわからないまま、初めて触れる外国の人々と親しく交わるようになり、その影響もあって高校はミッションスクールに進みました。

聖書の授業はありましたが、真理への飢え渇きがなく、ひとつのみことばも心に入らず、イエス様と出会うことはありませんでした。若いイギリス人シスターの英語の授業が楽しく、将来は通訳の仕事に就きたいという希望を持ちましたが、家の経済的なことを考え自分の判断で進学を断念しました。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。（箴言　16・9）

結婚するまでは浜松に住んでいました。二十四歳で岡谷に住む主人正雄と結婚、翌年に長男智広が与えられました。子どもたちにいろんな国の言葉に触れさせてあげたいという願いから、ある組織に所属し、テープの中のお話を聞いたり、歌ったり、踊ったり、ゲームをしたり楽しく活動していました。

あるとき、口の中に違和感を覚え、耳鼻咽喉科で組織検査を受けました。三日で呼び出され、信州大学病院で治療するようにと紹介状を渡されました。舌癌でした。治療が始まると、地下のRIと呼ばれる放射線が漏れないところに入れられ、家族も面会できなくなるということでした。

その治療が始まる前日、主人が友人からの一通の手紙を持ってきてくれました。その手紙の中には聖書のみことばが書かれていました。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。…すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・5〜6、11）

意味はわかりませんでしたが、枕元に置いて何度も読みかえしました。不思議と心が落ち着いたのを覚えています。

この治療は、二度と受けたくないと思うほどの苛酷な体験でした。退院後も口の中は真白になり、痛みのためにおかゆとヨーグルトを流し込むような状態でした。医師の言われたとおり、三か月後には徐々に回復して、少しずつ日常生活に

慣れていきました。

あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。（イザヤ　25・1）

その数か月後、智広の大学の卒業式に出席するため、病み上がりではありましたが、ひとりでアメリカのソルトレークに向かいました。このことが、主のあわれみによる恵みと救いへの導きだとは、当時思ってもいませんでした。

卒業式の前夜、共同キッチンで、ひとりの大学生から、「これ読んでくれますか?」とA4サイズの紙が手渡されました。そこに自筆で、ぎっしりと書かれてあった中の一つのみことばが心にとまりました。

自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。（マタイ　5・46）

また、「いつか読む時があるかもしれないから、この聖書を受け取ってください」と聖書も渡されました。イエス様がこの大学生を通して、働いてくださったことが、後でわかりました。

帰国して四日後に突然激しい痛みに襲われましたが、医師からは治療はすべて終わっているので自然の回復を待つように言われました。このときから死の恐怖が襲ってきて、孤独と不安と絶望の中で、絶対的に力強い方に私をしっかりと捕えていてほしいと心の中で叫びながら、希望もなく虚しい日々を過ごしていました。

暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。（マタイ　4・16）

この時、聖書を開いてみようという思いが起こされました。すると、イエス様は語ってくださいました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

主は、不思議な方法で伊那集会へ導いてくださいました。初めての集会のメッセージの中で、「宗教と信仰は違うよ。宗教は人間のつくったもので、信仰はイエス様に頼ることだよ」とベックさんが話されたことが、心の中に深く残りうれしくなったのを覚えています。

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。（詩篇　16・11）

同じ時期に、主人に脳梗塞の病が与えられ、だんだんと日常生活に支障が出始め、仕事もできなくなり、退職してからは収入が途絶えてしまいました。私の心の中にはいつも主人への不満がありました。ある時、我儘（わがまま）な思いで主人を傷つけていたことに思い至り、自分のうちに恐ろしい汚いものが潜んでいることを知って、打ちのめされました。主は、目も耳も閉ざして自分の罪もイエス様の十字架の贖いもわからずにいた私を、主人との生活を通して光の中へ引きだしてくださいました。

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。（1ヨハネ　3・16）

自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。（ガラテヤ　6・8）

主の訓練は、息子夫婦の問題を通しても与えられました。私たち夫婦にとって、とても深い悲しみと痛みでしたが、このこともごう慢な私を砕いてくださるための主のご愛だと受けとめることができました。

神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

主人は、召されるまでの一年、胃癆（いろう）による経管栄養、酸素吸入、と寝たきりの状態になりました。医療の質が高く、私しか介護に携わることができないため、二十四時間体制の在宅介護となりました。主人のそばにはいつもイエス様がいてくださって、部屋の中は主の平安に包まれていました。気管を切開したために声は出ませんでしたが、透き通った澄んだ目はいつもイエス様を見つめているようでした。

あなたの目は、麗しい王を見、遠く広がった国を見る。（イザヤ　33・17）

心の通い合う恵みの感謝の日々でした。ベックさん、ミシヘンさんはじめ、兄弟姉妹の方々が何回もお見舞いに来てくださり、

能者が王たちをかしこで散らされたとき、ツァルモンには雪が降っていた。（詩篇　68・13〜14）

主人は今、いのちの水の泉に導いてくださったイエス様のおそばで、目の涙をすっかりぬぐい取っていただいて憩っている、と思うと本当に平安になります。主人の病を通して、この小さな家に、祈り会、家庭集会と、主にある交わりの時を豊かに備えていただきました。イエス様のご再臨を待ち望みながら、姉妹たちと心を合わせて祈り合える恵みを心から感謝しています。

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。（2コリント　5・15）

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富を

主人は全身で喜びを表していました。これらのお見舞いをきっかけとして、ご近所の方が次々と導かれ、父も九十六歳の時に交わりが与えられました。このようにして主は、主人の病気をも用いてくださいました。

召される二日前のことです。ある兄弟がヨハネ17章を拝読されたとき、声が出ないはずの主人がはっきりと「アーメン！」と言いました。これが最後の声でした。

その翌日、主人は私の顔をじいっと見つめて、「ありがとう」と口を動かして心からの感謝の気持ちを言葉で伝えてくれました。本当に主のあわれみでした。主人は、罪の赦し、永遠のいのちをいただいて、変わらない平安のうちに二〇〇八年三月二十七日に天に召されました。

この日は朝から季節外れの牡丹雪が降り、辺り一面真っ白に包まれました。葬儀まで一週間ありましたが、その間、火葬に付すことなく、葬儀当日まで守られました。

あなたがたは羊のおりの間に横たわるとき、銀でおおわれた、鳩の翼。その羽はきらめく黄金でおおわれている。全

もって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。（ピリピ　4・19）

三澤正雄／二〇〇八年三月二十七日　昇天
三澤博子／出身、静岡県浜松市　現在、長野県岡谷市
浜松海の星高等学校、ラボ教育センター
言語交流研究所（ヒッポファミリークラブにて多言語学ぶ）
長男・智広／イースタン勤務

11 人の証し　Unser HERR lebt

主が私に用意された道

古田　静子



右が静子さん、夫の俊秋さん、長女の桐子さんと

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。

（1コリント　2・9）

早朝、目を覚ますと、灯りの下で夫は静かに聖書を開いています。主は、私の家族のうちにも奇跡をおこし、ご自身の大いなる愛を現わしてくださいました。主のあわれみに心から感謝します。

1　主に出会うまで

私は一九四六年に農家の長女として生まれました。下に妹二人がおり、将来は私が婿養子をもらって家を継ぐのだと感じながら育ちました。短大まで進学させてもらい、卒業して公立学校の養護教諭に採用されました。学生生活は不真面目で遊びまわっていましたので、子どもたちの前に立つ自信はなく、空っぽの中身を隠すのに必死でした。表面は取りつくろっていましたが、内側では頑固なプライドと劣等感の塊が渦巻いていました。こんな生きづらさから解放されたいと、この世に自由を求めました。しかし、そこは空（むな）しい幻の世界でした。自分の愚かさにも貧しさにも気づかず、この世をさまよった者でした。

むなしいものを追い求める者は思慮に欠ける。

（箴言　12・11）

すべての人間は愚かで無知だ。　（エレミヤ　10・14）

私は、二十三歳のとき、三歳年上の夫とお見合いし、結婚しました。姻戚（いんせき）にあたる人です。

私は、それまで結婚について真剣に考えたこともない幼稚な者でした。両親は、私にはもったいないような人だと、たいそう気に入り、結婚を勧めました。婿養子として来てくれることになり、迷いながらも結婚しました。新しい生活は不安だらけでしたが、共働きをしながらスタートしました。

夫は周りからも信頼されていて、生活もきちんとして真面目な人でした。私は自分との違いにびっくりし、自分のいい加減さをはっきり見せられるようでした。わがままな私には、ちょっと窮屈でもありました。

やがて、私のいい加減さや軽率さが原因で夫と口論することが多くなり、信頼関係が成り立たなくなっていきました。夫が何を考えているのかわからない苛（いら）立ちと一致のない空しさを、私はお酒や買いもので埋めようとし、夫はギャンブル（麻雀）へ走り出しました。後に子どもが二人与えられましたが、何も変わらず、この世の快楽に身を浸して、その場限りの楽しみを求め続ける日々でした。

夫はいつの頃からか、週末は行方がわからなくなる生活をするようになっていました。ギャンブルの大きな罠（わな）にとらわれていたのです。ギャンブルはお金の感覚を鈍らせるそうですが、夫も例外ではなく大きな借金につきまとわれていました。体験したことのないことでしたので、私にとって耐えがたい恐怖となりました。夫を罵倒（ばとう）しながらも、反面、

夫が哀れに見えて、自分がこんな姿にしてしまったと心を痛めました。借金が発覚する度に、サラ金などの高利分を銀行融資に借り替えて返済しなければなりませんでした。夫がいない夜は不安と心配で眠れなくなり、泣きながら真夜中熊本市内を探し回ったこともあります。ギャンブルを止めるように幾度話し合ったかわかりません。夫もそのときはわかったと答えるのですが、次の週はまた逆戻りです。後でわかったことですが、夫は私に責め立てられることでかえって安心したようです。

夫の問題と並行して子どもにも様々な問題が出てきました。衝撃が大きかったのは小三の息子の反抗です。子育てもダメ、夫もダメ、それに自分もダメ。悲しい現実を前にして、私は疲れ果て、家族もろとも谷底へ落ちて行くのを感じました。

あなたは私を最も深い穴に置いておられます。そこは暗い所、深い淵です。（詩篇　88・6）

私は私の嘆きで疲れ果て、私の涙で、夜ごとに私の寝床を漂わせ、私のふしどを押し流します。私の目は、いらだちで衰え、私のすべての敵のために弱まりました。（詩篇6・6〜7）

2　日曜学校へ

私たちはどこへ行こうとしているのだろう。ついに進むべき道が見えなくなり立ち往生してしまいました。恐怖が私を襲いました。ここにきて初めて自分を変えたいという思いが起きました。しかし、どうすればよいか何もわかりませんでした。

そんな日を過ごすうちに、なぜかふっと子どもたちを日曜学校へ連れて行ってみようという思いに導かれました。まだ私が幼かった小学生のころ、「蟻の街のマリア」という映画を見たことを思い出したのです。それは感動的なキリスト者の物語でした。教会には何かがあるように思われ、淡い期待をもって、教会を探し訪ねました。この日を機会に、礼拝、交わりへと導かれました。教会の一人の若い姉妹が、私のところに来て、「新しい方を導いてくださいと神様に祈っていたら、古

田さんが来られました」と喜んで言われたので驚きました。祈りが聞かれることを初めて知らされたときでした。何もわかりませんでしたが、賛美を聞いているだけで慰めをいただき涙がこぼれました。苦しみが流れ出て行くようでした。

そして初めて開いたマタイの福音書から主は語ってくださいました。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。（マタイ　6・33〜34）

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。（マタイ　6・27）

主は私の必要をご存じでした。みことばから大きな慰めを受けることができました。

3　悔い改めと罪の赦し

聖書を読むようになって、主が私の内側を鋭く探ってくださいました。みことばが心に突き刺さってきました。

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。（ガラテヤ　5・19〜21）

罪から来る報酬は死です。（ローマ　6・23）

神様を知らず、罪を知らず、自分勝手に歩んできたこと、自分の中には汚れた思いが隠されていることなど、自分がどんな人間であるかを明らかにされました。目が開かれ、

問題の根源は私自身だと知りました。悔い改めに導かれ、思い出す限りの罪を主に告白し、「こんな罪人をお赦しください。これからは神様のもとに居させてください」と祈りました。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。（1ペテロ　2・24）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・9）

たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。（イザヤ　1・18）

そして何よりも主に感謝したことは、我が家に毎週土曜日、家庭集会が与えられたことです。特に教会の兄弟姉妹が私たちのことを心から心配してみんなで集まって祈ってくださいました。夫はいつも留守でしたが、主は夫のこともご存じで確実に働いてくださっていました。このことを後で知ることになったのです。

ある晩のこと、夜遅く帰ってきた夫は、寝ている私を起こして別れ話を切り出しました。また大きな借金を持って追い込まれていたのです。私はまだみことばに従うことを知りませんでしたが、主は守ってくださいました。翌日、私は夫と二人で喜びながら礼拝に出席しました。

それから夫の上に主は働いてくださり、悔い改めて洗礼まで導かれ、毎週家族四人で教会生活が始まりました。私は、もうこれで安心だと思って喜びました。しかし、この生活も長くは続きませんでした。夫は単身赴任をきっかけに主から遠ざかってしまいました。まだ、昔の生活と決別できなかったのです。

主イエス様が十字架にかかって私の醜い罪を清算してくださったことを知り、救われたことに感謝しました。ほどなくして菊池川で子どもたちに見守られて洗礼の恵みに与らせていただきました。教会の姉妹が、「教会に来た頃は暗い顔をしていたけど、明るくなったね」と共に喜んでくださいました。

家の中では何かが少しずつ変わっていきました。何をしていても賛美と涙が流れ出てきました。涙を流しながら喜んでいるので、夫は私を見てどうかしたのかと尋ねるくらいでした。目に見える状況は何も変わりませんでしたが、苦しいとき、悲しいとき、不安なとき、どんなときにもありのままの心でイエス様に叫び求めることを知り、大きな慰めをいただくようになりました。

彼らが叫ぶと、主は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。（詩篇　34・17）

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。（ヨハネ　13・7）

4　御霊との出会い

私もまた、夫の行動に目を向けてしまい、不信仰に陥っていました。そんなとき、教会の本棚にあった「光よあれ」が目に留まりました。そこには主が確かに生きておられると確信させられる証しがありました。読んでいるうちに、私には信仰の喜びも主に信頼して委ねることもない、ことに気づかされました。「主よ、私は今とてもみじめです。私にもこのような信仰と信頼を与えてください。今から私はどのように生きたらいいのでしょうか」と祈らされました。

集会に導かれたのは、それからしばらく経ってからです。一人の姉妹から突然電話がありました。ベックさんが熊本に来られるというのです。私は「えっ！」と驚き、嬉しさでいっぱいになり、「主よ、あなたはすべてのことをご存じです。私の思い描いたこともなかったことを主はしてくださいます。主を賛美します」と感謝しました。当日、熊本市内で開かれた家庭集会に私は何もかも後回しにして出かけました。それから熊本で集会が起こされて今に至っています。

キリスト集会に集うようになってからも、自分の霊的未熟さから集会に行けなくなったこともありました。しかし主はすべてを恵みに変えてくださいました。この経験が私の信仰の大きな転機となりました。

主はまず夫との関係に働かれました。聖書を読むうちに箴言のみことばに目が留まりました。

恥をもたらす妻は、夫の骨の中の腐れのようだ。

（箴言　12・4）

内側がえぐられるような痛みを感じ、今まで当然だと思っていたことがひっくり返され、「これは私のことです」と主の前に告白しなければなりませんでした。自分では考えも及ばなかったことでしたが、祈りに導かれ、夫にごめんなさいと手紙を書きました。

さらに主は素晴らしい事実を教えてくださいました。キリストの内住と自分の死と復活について知ったことです。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

（ローマ　6・8）

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。

（コロサイ　3・3）

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

（1コリント　6・19）

このみことばが新鮮に私の中に入り、私は驚きと共に大きな喜びをいただきました。主を信じたときから私は主の中で生きており、主も私の中で生きておられたのです。私は一人ではありませんでした。

「主よ、ごめんなさい。私は気がつきませんでした。あなたが内に住まわれていたことを。私はあなたのものです。これまで私の自我が内側を占領して、御霊さまを片隅に押しのけていました。どうかこれからは、私の真ん中の広い所にお住まいください。そしてどうぞ私の隅々まで新しくし、ご支配ください」と祈りました。また、主は私ともっと親しく交わりたいといつも待っていてくださることを知り、主を友と呼ぶことができる特権をいただきました。

5　家族の救い

両親は田舎で農業をしながら二人で生活しておりましたが、高齢になって私たちと一緒に暮らすようになりました。父は聖書に関心を持ち、NHKの通信講座を受けておりました。しかし信仰を持っているわけではありませんでした。ある日の熊本の集会で兄弟姉妹それぞれが自己紹介をしたのですが、父は「私はまだ真っ白です。何も信じていない」と心の内を明らかにしました。そう語った三日後、父は山で作業中に転げ落ちました。連絡を受けたとき私は驚き、主が働かれたと思いました。

救急病院に運ばれ、すぐに手術が行われました。ろっ骨骨折、頭蓋骨骨折、硬膜下出血、脳出血等の大けがでしたが、主はご栄光を現わしてくださいました。後遺症が少し残りながらも再び生かされ、後には礼拝やキャンプに参加できるようになるまで回復しました。

両親は、ベック兄が鹿児島に来られたときにお交わりをいただきました。父はベック兄にお会いして、開口一番「私には天国行きの切符がありません」と言いました。ベック兄は救いについてわかりやすく話してくださり、両親は主を受け入れ一緒に祈ることができました。その後、大牟田キャンプで洗礼の恵みに与ったことは、大きな喜びでした。

父は大けがから十年間、この地上で生かされました。晩年は病との戦いでしたが、大好きな「九十九匹の羊」をいつも賛美しながら、主からいただいた平安な日々を過ごしました。柔らかい笑顔は主が共におられる証しとなりました。怒って怒鳴っていた若いころの父とは思えない変化でした。

そして父は　天国行きの切符を持って、八十八歳で天国へ出発しました。

父の葬儀は、東京や九州の兄弟姉妹のお祈りとご奉仕によって執り行われました。まだイエス様を知らない多くの親戚、父の友人知人の方々にイエス様を紹介できたことはとても感謝でした。

当日、一番の恵みは、主が夫に直接働かれたことです。夫は葬儀のあいさつで、イザヤ書43章1節から3節を読みました。このみことばで主は夫を捉えてくださいました。主は父の葬儀を通して夫をご自分のもとに引き戻されたのです。主のご計画は何と完全なことでしょう。私はただ圧倒されて主を恐れました。それから後、夫は悔い改めに導かれ、共に礼拝に集わせていただいています。これは、ただ主の一方的なあわれみです。

私は相変わらずわがままで罪の性質を持つ者です。しかし、主は、私がどのような者であるかを十分に知り尽くしたうえで私を受け入れてくださっており、決してご自身の愛の性質を変えられることのないお方です。ありのままの姿で、安心してこの道を歩めることにとても感謝しています。また、家族のことも、主は一人ひとりに対して救いのご計画を持っておられますので、感謝して待っております。

今、私たち夫婦は一日中一緒に過ごす時間が与えられております。滑り落ちた谷底から私たちを引き上げてくださったうえに、退職後にこんな静かな日々まで用意してくださったあわれみを覚えるとき、主から貴重な時間を今いただいていることに気づかされます。主の再臨という喜びの日を迎えようとしている今、私はどのように生きたらいいでしょうかと祈らされます。

主は、愛をもって一緒に歩いてくださいました。私を襲った一つひとつのできごとはすべて主から来たものであり、主ご自身を知るための道でした。主は、どうしようもない愚かな私をあきらめず、ご自身の愛ゆえに忍耐し捨てられませんでした。真に主を愛し礼拝します。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。
（哀歌　3・22）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。
（2コリント　5・17）

わたしは山や丘を荒らし、そのすべての青草を枯らし、川をかわいた地とし、沢をからす。わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。
（イザヤ　42・15〜16）

古田静子／熊本県立山鹿高校（旧）、九州女子短期大学卒業
夫・俊秋　長女・桐子　長男・哲朗

主の御心を求めて

辻野　健



右から健さん、妻の智子さん、直仁さん、佑香ちゃん、祥子さん、ベックさん

私は一九三四年沖縄県石垣市で農家の三男坊として生まれ育ちました。当初は貧しさゆえに、幼くして馬の草刈りや水くみ、畑の芋掘りなどを一人前に任されていました。四年生になる頃には第二次世界大戦が始まり、B29が雨の如く落としてくる弾をかいくぐり、命からがら逃れることもありました。また、空から撒かれたマラリヤ菌に感染し、高熱と悪夢で死ぬ寸前の私を必死で看病する母の姿は、六十八年たった今でも思い出されます。その様な状況の中で私の命が残されたのは、永遠のいのちをいただいて生きるようにとのイエス様の大きな憐れみでありました。

その後、中学には進まず家計を支えるためひたすら働き続けました。そして、青年期を迎えた頃、原因不明の激しい頭痛に見舞われ、大病院での受診と、また夜学での再チャレンジを目的として慣れ親しんだ故郷を後にして沖縄本島に渡りました。母ともども、わずかばかりの家財すべてを処分しての移住でした。しかし、あらゆる検査をしたものの、頭痛の原因はわからず、間もなく夜学での学びにも挫折してしまい、海岸に行っては故郷に向かって後悔に涙することも度々でした。

そのようなある日の帰り道、聴こえてきた讃美に惹かれて思わず飛び込んだ教会で、牧師さんが人々に手を置き、祈る姿を見ました。その時から、初めて神様の存在を意識し始めました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

それからの私は、歩いて通う職場までの道のりで、また、暇をみつけては自宅裏の原っぱで一人祈り続けました。それまでは聖書を見たことも触れたこともなく、まるで乾いたスポンジが水を吸収する如くに夢中で読み始めました。毎日、神様に出会った喜びで満たされていました。しばらくして、あれほど苦しみ続けた激しい頭痛は、いつの間にか消えていました。

その後、教理や安息日を重視する教会に移り、熱心に学んでおりましたけれども、ある時にふとイザヤ書12章2節、「見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた」のみことばによって、救いはイエス・キリストだけ、その他には何もないのだとはっきりと思わされ、真実なるものを求め始めました。しかし、その教会では仕事、そして妻と二人の娘、その娘達の就学までもお世話になったこともあり、悩みながらも留まり続けました。三十年余りの年月でありました。

その教会生活の中で、一年ほどは異言や癒しの祈りをする熱狂的な教会に惹かれ、半監禁状態の中から危機一髪で脱出したことがありました。その後もいくつかの福音的な教会等を密かに訪ね歩くようなこともありました。しかし、真実なるものにはなかなか出会えず、主の再臨を待ち望む一方、定年後もこのような歩みで人生は暮れゆくのであろうと思っておりました。

長女は大阪で家庭を築き、三人の孫に恵まれました。続いて次女も地元沖縄で結婚し、二人目の出産を迎えた頃、次女

をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。

（ハバクク　3・17～19）

そのようなある日、自宅の屋上の片隅で一人祈っていましたら、ふと以前にいただいた『光よあれ』の本のことが思い出されました。約八年前に数回訪れたことのあった沖縄キリスト集会のことなど、すっかり忘れ去っていましたのに、思い起こされた途端、いても立ってもおられず、本棚の奥からその本を探し出し、「次の日曜日は、この集会へ行ってみる」と家族に宣言しておりました。

その時から今に至るまで、主はキリスト集会の兄弟姉妹の中へ招き入れてくださり、真実なるものへと導いてくださいました。当初は、日曜日毎に多くの兄姉方が自宅を訪問してくださり、イエス様を中心とした交わりの中、共に祈り、励ましをいただきました。心から感謝しています。そして、知識や教理に

の三歳になる孫娘の佑香が突然、病に倒れたのです。大変、元気な明るい子で、妻にも私にも喜びの子でありました。その佑香が風邪気味とのことで、妻と私が付き添って娘親子は病院へ行きました。半日も経っていない頃でしょうか、佑香の容態が一変し、この病院では対応できないからと大学病院へ緊急転院となりました。この間の佑香の状態はほとんど知らされず、小児病棟の外の廊下でひたすら待ち続けました。ようやく病棟から出てきた娘夫婦は、目に涙を溜めながら、佑香の心臓が止まってしまったこと、再び動き出したけれども危篤状態であることを告げました。私はこれまでにない、これからもない様な、気を失わんばかりの衝撃を受けました。その後は、佑香は脳に障害を受けたために、愛らしく元気にはしゃぎ回る姿を見せることはありませんでした。絶望の中、これまで続けてきた教会生活の一切に終止符を打ち、「何故ですか、どうしてですか」と尋ねつつ、助けと憐れみを請うて、ひたすら祈る毎日でした。

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実

よっても、また自らの足でいくら捜し歩いても知り得なかったことを、主は、私どもの求めていたこととはまったく異なった主の道の中で、孫の試練を通してお示しくださいました。

孫の試練に続き、妻に肺腺癌が与えられ、妻も次女と孫二人と共にキリスト集会へ導かれました。次女の夫の直仁兄も突然の病を通して、主にある兄弟に加えられました。そして長年、主イエス様を拒み続けてきた兄夫婦の辻野英雄兄と初子姉が、長女の召天を機に信じる者とされました。次に義弟の富島盛三兄がキリスト集会へ導かれました。大阪在住の長女と夫の山口宗司兄、その孫三人もイエス様と共に歩み始め、芦屋集会に集っております。最近では直仁兄の御両親である新城光仁兄、直枝姉が主にある群れに加えられています。苦しみを経て、次々に主のしてくださった多くの実りを見ます時に、「主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません」（詩篇　145・3）と心から主を賛美せずにはおられません。

私自身、二〇二年十一月に大腸癌が与えられました。その手術の後、腸閉塞、敗血症、胆のう摘出術、今現在は前立腺癌の放射線治療の途中にあります。これらもすべて、主のなされたことです。晩年を迎え、病を授かっている今、私は大変しあわせに思っております。この肉体が衰えるほどに、主の内に静かに憩う恵みが与えられているからです。主の良しとされるその日まで、御足跡に従って参りたいと願うばかりです。

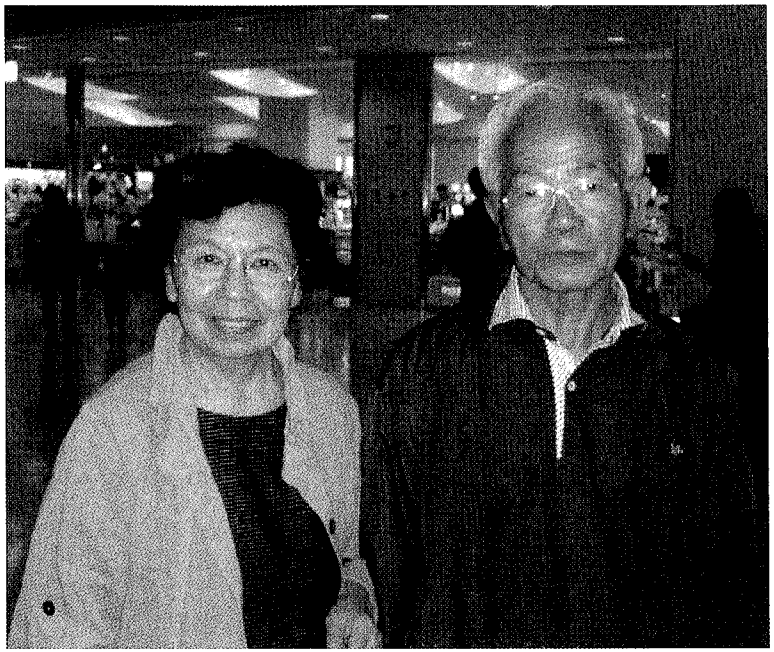
私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

（2テモテ　4・6～8）

辻野　健／沖縄県石垣市出身。石垣市登野城小学校。
妻・智子

主からの喜びと確信

辻野　智子



夫の健さんと

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

私は一九四三年に南洋諸島のロタで生まれました。太平洋戦争が没発し、父は防衛隊に召集され、砲弾が炸裂する中、母は私を背中におぶって逃げ回ったそうです。間もなく終戦となり、郷里の沖縄に帰って来ました。私の叔母は元々、熱心な祖先崇拝者でした。そのうちに叔母の家の隣に教会が建てられ、近隣に伝道が始められました。毎日のように牧師夫妻が叔母の家へ訪問してくださり、イエス様のお話を聞かされていたそうです。叔母は、「私は祖先崇拝者ですからアメリカの神様はいいです」と何度も断ったそうですが、訪問を受けるうちに、「実は自分の祖先を祭ってある、戦争で焼け出された本家を捜しています。早く捜し出して手を合わせたいです」とその牧師にお話しをしましたら、「この天と地を創られた真の神様はイエス・キリストですよ。唯一の神様であるイエス様を信じてすべてお任せしたら、何ごとも解決してくださいますよ」と毎日のように伝道され、心動かされた叔母はイエス様が本当の神様ならと信じるようになったそうです。そして母は、自分たちが信じていたユタ（霊媒師）は、何の解決も与えてくれないのだと叔母から聞かされてからは、「今日限りユタ宗教から離れ、イエス様を信じよう」と、それまで仏壇に熱心に合わせていた手を、今度はイエス様に向けたのでした。次女の私を含め五人の子どもにも、「イエス様を信じなさい、頭の毛の数さえもご存知である真の神様を信じるように」と耳にタコができるほど、言い聞かせておりました。

地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。

（イザヤ　45・22）

私は二十五歳の時に受洗にあずかりました。娘の結婚についての母の思いは強く、イエス様を信じる人と結婚すれば間違いないと、将来の相手を牧師にお願いしてあったようです。間もなくして主人を紹介され、結婚いたしました。そして、二人の娘を授かりました。娘たちは、小・中・大とミッション系の学校を卒業し、それぞれ就職、結婚と独立いたしました。この頃は、長女には三人、次女には二人のかわいい孫たちが与えられ順風満帆かのようでありました。

主よ。人とは何者なのでしょう。あなたがこれを知っておられるとは。人の子とは何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。人はただ息に似て、その日々は過ぎ去る影のようです。

（詩篇　144・3～4）

私は、次女を出産した後、それまでの軍の職場から退き、主人と同じミッション系の病院に勤めることになりました。お産以外は仕事も休まず、働きずくめでした。そして、あと二年で定年退職を迎えようとしていた矢先、二〇〇三年十二月、次女の孫娘の佑香（三歳）に予想だにしなかったことが起こりました。これから先、生涯背負っていかなければならない出来事でした。

具合の悪い佑香を連れ、病院を受診いたしました。医師は「点滴一本ぐらいで、後はお家に帰っても良い」と話しておりました。決して不安はぬぐえませんでしたが、医師の言葉に信頼し、娘親子に付き添っておりました。どのくらいの時間が経ったのか定かではありませんが、佑香の容態が急変し大学病院への緊急搬送の途中、心停止を起こし、そのため、脳に酸素が届かず植物状態となってしまったのです。毎日、涙と共に必死に祈り続けました。その後、虫垂炎の手術とネフローゼ症が、わずか三歳の小さな体に起こされました。私はこれらのことを機に退職し、そして心から熱心に集っていました教会からも退きました。

見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試みた。（イザヤ　48・10）

二〇〇六年、百歳の母に脳梗塞が与えられました。間もなくして、母に付き添っていた私自身も体調を崩してしまいました。母の病室の冷房で冷えたせいか、膝の痛みで起き上がれず、内科の医師の勧めで入院することになりました。その際になされた一般検査の胸部レントゲンで、右肺に三センチほどの影が見つかり詳しい検査をした結果、それが肺腺癌であることが判明しました。三十年余り教会生活をしておりましたのに、組織や会則等に守り従っていれば救われると、ひたすら一生懸命でしたし、「死」については、お墓の前は避けて遠回りするほどの恐れようでありました。その私に癌の病が起こされ、いよいよ死の恐れを避けては通れず、入院中は恐怖と悩みの中、聖書を開いてもまったく平安がありませんでした。そして、母のことは埼玉にいる弟を呼び寄せて看てもらい、二〇〇六年八月九日の手術に至りました。

主よ。私をあわれんでください。私は衰えております。…私のたましいはただ、恐れおののいています。（詩篇　6・2〜3）

孫の病を通して主人が導かれましたキリスト集会の姉妹方が私の病室を訪ねてくださり、初めてのお交わりとお祈りをいただきました。それからはたびたびお見舞いくださり、お交わりいただくそのひと時は不思議と平安で満たされました。ある日、姉妹のお一人が、「家族が一致することに大事な意味がある

そうですよ」と話してくださいました。その頃の私たち家族は、思い思いの信仰で霊的一致がなく、私はどこか教会に行きたいけれど、元の教会に戻る気になれず、主人についていくこともできずに悩んでおりました。姉妹のその言葉に心動かされ、その日のうちに次女に電話をし、「キリスト集会に行こうね」と言いましたら、「うん、行く」と即答が返ってきました。

どうか、みなが一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。（1コリント　1・10）

退院後、キリスト集会に集い皆様と共に賛美しました時には、涙が止まりませんでした。ベック兄を始め、兄弟姉妹の皆様とお交わりをする中で病気や苦しみは愛されている証拠であること、死は終わりではなく、生きていても死んだ後もイエス様は変わらず私たちと共におられることなどを知り、少しずつ死への恐怖から解放されていきました。そして長年の信仰生活の実態が、いかに自分本位な歩みであったか、どれほどうなじの強い者であったのかと気付かされ、心からの悔い改めに導かれました。イエス様は、孫の病と私自身の最も弱い部分に試練を備えてくださり、家族から始めて次々に私の周囲の人々を主の家族の中に加えてくださいました。そして、これからもさらに御心を成してくださると信じています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・8）

二〇一二年十月、主人に腸閉塞が与えられました。入院中に大腸癌が見つかり、敗血症、胆嚢摘出など、四年間に渡り次々と病が与えられました。命の危機に直面する度ごとにイエス様はご臨在をお示しくださり、苦しくも恵み豊かに持ち運んでくださいました。主の御名を心から賛美いたします。そして、キリスト集会の兄弟姉妹方には、主にあるお交わりとお祈りにより、支えていただきました。深く感謝しています。現在、主

人は前立腺癌のため、放射線治療を受けております。主のお計らいで、ある兄弟に教えていただいて、今の病院へお導きくださいました。しかも、そこには同集会の鵜飼姉妹が勤務されておりました。これらすべては、主の御業であったのだと痛切に感じています。ただただ感謝です。

私たちとしては、どうすればよいかわかりません。ただ、あなたに私たちの目を注ぐのみです。（2歴代誌　20・12）

今回お証しさせていただくにあたり、二つの喜びが与えられました。ある晩、証しについて主人と話し合う中、百二歳で召された母の話題になりました。生前の母は、「人間は罪人だから、心から悔改めなければ天国には行けないですよ」と言う主人に対し、「私は、別に悪いことはしていないよ。盗みもしてないし、あなたの言っている意味がよくわからないさー」との一点張りでした。その母の病室へ主人が見舞いに行きました時に、「健さん、ごめんなさい。本当にごめんなさい」と慌てた様子で言ったそうです。

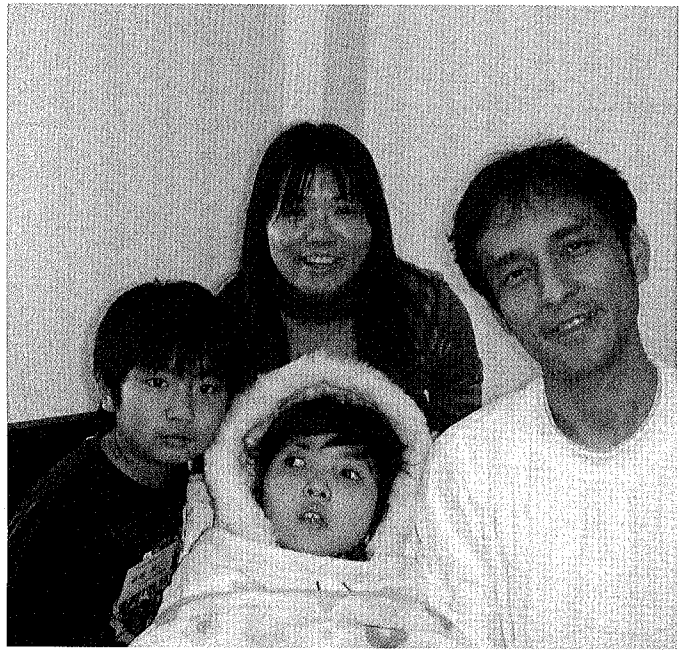
私自身、この二人の会話については何度も聞いていた話しでしたが、キリスト集会へ集っていても「死」に対する恐れがまだ解決されていなかったその頃の私は、年老いて病床に伏している母に対して何と無神経なのかと、主人に対し腹立たしく思い、その話題になるといつも自分の耳をふさぎたい気持ちになっておりました。しかし、その晩は違いました。「そうか。主人へのごめんなさいの言葉は、主への心からの悔い改めだったのだ」と、はっきりと気付かされ、それと同時にこれまで主人を裁き続けてきたことが強く示されて、その場ですぐに、主人に対して心から謝ることができました。そして、今までずっと心に抱えていた母への思いをすべて、主に明け渡すことができました。母の救いの確信と主人への悔改めが与えられ、私は喜びで満たされました。主に心から感謝いたします。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。・・・たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。（詩篇　23・1、4）

辻野智子／沖縄県出身。コザ中学校、文化服装学院卒。夫・健

ゆだねて・・・。愛する主イエス様は導いてくださる

新城　直仁



右から直仁さん、佑香ちゃん、祐仁くん、後ろが妻の祥子さん

私は、一九六九年二月に三人兄妹の次男として沖縄県浦添市に生まれ、沖縄特有の先祖崇拝に熱心な両親のもとで育ちました。子どもの頃、成績の悪い私は劣等感の中で過していました。中学ではいじめにも遭いました。苦しい中学生活も過ぎ、高校そして大学へと進学できましたが、兄との口論をきっかけに実家を出て一人暮らしを始め、好き勝手な生活を送っていました。

大学卒業後、県の社会福祉協議会で働くことになり、四年間勤めた後、市社会福祉協議会へ転職して祥子姉妹と出会いました。そして一九九九年十二月末、沖縄本島より約四〇〇キロメートル離れた西表島の老人施設へ転職することになり、祥子姉妹と結婚しました。これらのことはすべて主の導きによるものであったと、今は確信していますが、当時まだ主イエス様を信じていなかった私との島での生活は、祥子姉妹には大変な試練であったと思います。

翌二〇〇〇年十二月には長女佑香が誕生。二年の勤務後、沖縄本島へ戻ることになり、揺れる船で船酔いに耐えながら

帰ってきたことを思い出します。翌二〇〇三年一月に長男祐仁が誕生。そして同年十二月十八日に大きな試練が与えられました。

数日前から体調を崩していた長女佑香の容態が急変したのです。「病院へ連れて行く」とのメール連絡が妻からあり、仕事を早めに切上げて帰宅したところ、まだ病院とのことでそちらに向かいました。病院へ着くと、主治医が不在で、他の医師の診察で胃腸炎と診断されたとのことでしたが、佑香は脱水のため点滴を受けていました。私が着くまでにいろいろなことがあったようです。改善のないまま入院が決まり、病棟へ上がり、佑香を抱き体重測定をしたような気がしますが…転院・救急搬送されるまでの記憶がありません。妻の話では、琉大病院へ救急搬送したのに、何故か救急治療室ではなく小児科病棟へ向かったそうです。小児科病棟への移動中エレベーター内で泡を吹き心肺停止したとのこと。私が病棟へ行った時は、ナースステーション横の病室で心肺蘇生が施されていました。信じがたい大きなショックの中で、狼狽せずにいられたのは不思議でした。これも主の御業、まだ信じていなかった私をも主は支えてくださっていたのだと思います。イエス様は何でもできるお方です。佑香をすぐ治すのではなく、私たちを主に導くために試練を与えられたのだと…今は思えます。

人工呼吸器やたくさんの管が付けられ、反応のない佑香の姿。次々と聞かされる病状。それはショックの連続でした。絶望の中、妻と共に祈りの時が与えられました。イエス様の話を聞かされ、一緒に祈ろうと言われて、初めて偶像の神様ではなく「主よ。イエス様…」と祈りました。でも、悲しみの中での祈りは「佑香を治してください」と嘆願するだけであったように思います。

医師の説明によれば、佑香を心肺停止にした要因は分かるものの、原因は不明とのことでした。その後、佑香の病状の小さな改善が大きな恵みとして与えられていきました。

二か月ほどは病院と仕事場とを行き来する生活で、妻も実家と病院の二重生活でした。この間、義父母の辻野兄姉には祐仁の世話をしていただきました。三か月ほどで退院することになり、重度障害として在宅生活が始まりました。辻野兄姉の大きな支えを得て同居生活が与えられ、家族で礼拝

する時も備えられました。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。（詩篇　23・4）

その生活の中にも、いろいろ心乱されることがありましたが、主に支えられて歩むことができたと思います。しかし主イエス様に祈り、願いはするけれども、まだ自分で何とかしようという考えは消えず、主に委ねることができませんでした。二〇〇五年、佑香は急性虫垂炎で緊急手術を受け、翌年には腎臓病ネフローゼ症候群という病も与えられて治療生活は一年以上に及びました。その頃、辻野兄姉と妻がキリスト集会に導かれ、集会の方々との交わりが与えられました。

当時の私は、佑香の傍にいて外部との交わりを拒絶する頑なな生活をしていました。集会から兄弟姉妹方が見舞いと交わりに来ていただいていましたが、頑なに交わりを拒んでいました。辻野兄姉や姉妹から集会へ行かないか、と誘いを受けていましたが、「佑香と一緒にいる」などと理由をつけて拒んでいました。ただ、沖縄での喜びの集いには参加していました。

喜びの集いでは、相変わらず交わりを避けるように、佑香と会場の隅にいたり、兄弟姉妹方と目を合わさないようにしていました。何回目かの喜びの集いで、「ご無沙汰しています」と声をかけていただいたのが北原兄でした。何故か素直に話すことができました。うろ覚えですが「いまの佑香が与えられた」と話していた、と思います。少しずつ集会にも集うようになりましたが、頑なな心はそのままで、相変わらず交わりは避けがちでした。

そして、そんな私に、二〇〇九年の十二月二十五日、てんかんという病が与えられました。職場でけいれん発作で倒れ、気が付くと救急治療室のベッドの上に横たわり、前後の記憶が抜け落ちていました。七日ほどで退院し、専門病院へ通院することとなり、抗てんかん薬に苦しめられる日々が始まりました。薬疹があらわれ、効果が出ずに、薬が次々と変更され、

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（1ペテロ　5・7）

それからも腫れで見えない状態が続きましたが、二日目には腫れが引き、少しずつ目が開き見えるようになりました。イエス様に感謝致しました。その頃辻野兄姉から、集会の兄弟姉妹の皆様で祈っていただいたことを聞き、感謝で涙が出てきました。退院するまでは一か月かかりましたが、私にとっては、主との交わりと恵みの日々となりました。また、入院中に集会の兄弟姉妹が見舞いに来てくださり、賛美とお祈りをしていただきました。感謝とともに主イエス様を信じると口にすることもでき、主のご計画の内にお導きくださり、大いなる恵みが与えられたと確信しました。イエス様は頑なな私を少しずつ、また大きく大胆にへりくだるようにと変えてくださいました。

そして翌年の二月には受洗の恵みにも預かり、イエス様に委ねて、拙い歩みを始めています。ただ主イエス様のあとをたどりゆくのみです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

また、私の両親もイエス様を信じ、集会へ集い始めています。兄と妹の救いを待ち望みながら、イエス様に祈り、委ねて、主の導きに従って歩みたいと思います。愛する主イエス様に委ねて歩める幸いを心から感謝しています。

新城直仁／沖縄県出身。県立浦添高等学校。沖縄国際大学文学部社会学科卒。
株式会社日本ケアサプライ勤務。
妻・祥子　長女・佑香　長男・祐仁

主よ、早く来てください

新城　祥子



右から祥子さん、夫の直仁さん、佑香ちゃん、祐仁くん

あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。――神である主の御告げ。――だから、悔い改めて、生きよ。

（エゼキエル　18・31～32）

私はクリスチャン家庭で生まれ育ちました。小学校からミッション系の学校に通い、礼拝のたびに聖書のお話しを聞いて過ごしました。幼い頃から、困ったときや悩みの日に神様にお祈りしますと、いつも幼子にもわかるようにお答えくださいました。そのような体験をしながら成長していくうちに、「信じる者は守られている」などと、純粋さは次第に高ぶりに変わり、社会人になってもなお、自分の愚かさを知ろうともせずに毎日を過ごしていました。また、生きる虚しさにも囚われ、何をするにもそのことが付いて回っていました。その虚しさを唯一満たしてくれたのが長女、佑香の誕生でした。彼女は、お話しがとても上手で活発なおしゃまさんに成長していました。

その佑香に試練が与えられたのは、今から十年前の二〇〇三年十二月十八日、三歳のお誕生日を迎えてから九日目のことでした。前日の夜中に嘔吐し、朝になってもいつもの元気がないので病院を受診しました。まだおっぱいを飲んでいた十箇月の下の子を見てもらうため、両親にも付き添ってもらいました。医師は「流行りの胃腸炎で、この程度なら点滴すれば良くなるよ」とおっしゃり、外来の一室で様子を見ていましたが、頭はぐったりと脂汗をかき、手足は冷たく、だるそうな姿に不安を感じつつも、医師や看護師がそばで診てくださっているのだから、と気持ちをなだめていました。夕方になっても改善の兆しはなかったので念のため入院することになりましたが、この時点でも医師は病状を軽度のものと捉えていたらしく、血液検査も母親の私に意見を求めてこられました。私はこのとき、点滴注射の際の、紫色の顔で抵抗していた娘の姿ばかりを案じました。直ぐ必要でなければ今は止めてほしいと答えたのです。後に私は、このことでとても苦しむことになるのでした。様子を診にこられた小児科医の当直医師は、私が「息をしているのかと思うほどぐったりしているが、本当に大丈夫なのか」と不安の思いの丈をぶつけたのに答えて、「大人だって、車酔いしたらぐったりするでしょ」と言って、私用で病院を出ていかれました。

キリスト教系のこの病院は、定年まで勤めあげた父と、現役で勤務中であった母の職場でしたし、何より私自身が生まれ育ち、そして三年半、看護師としてお世話になった空間でしたので、慣れ親しんだ病院での受診も勿論のこと、ドクターに対する信頼も厚く、当初の私達は不安ながらも身を任せる他ありませんでした。

仕事を終えた主人も加わり病棟へ移ってから間もなく、佑香の容態が急変しました。不安は一瞬で恐怖に変わりました。つい先ほどまで返事してくれていた佑香は、慌てて成された採血にも反応しませんでした。遠方に出掛けていた当直医の到着は大変遅れ、佑香の容態と検査結果を見るや否や転院の準備を始められましたが、待ち時間は果てしなく長く感じ

られました。救急車での搬送中、血圧は残るものの佑香の目は天井を向いており、速く速くと焦る気持ちとは裏腹に、大学病院に到着してもなお長い廊下をひたすら走り、さらにエレベーターで上がった六階の小児病棟に着いたときには遅すぎました。心停止を確認した琉大医師とスタッフが直ぐに心肺蘇生を始めました。救急車に一緒に乗り込んでいた当直医も病室の中まで付き添っていました。主人と私は廊下に出され、ベッドを囲むスタッフの背中をドアのガラス越しに見つめながら、私は神様にすがり付きました。すると次のみことばが湧き上がってきたのです。

私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

（ヨブ　1・21）

すかさず私は、「神様、まだ取らないでください！助けてください！」と祈りの中、必死に叫び続けました。その後、佑香の心臓は再び動き始めましたが、約十五分間の酸欠状態による脳へのダメージがとても大きかったために、重度の障害が残ってしまったのです。たくさんの管が繋がれた小さな体はとても痛々しく、昨日まで元気に遊び回っていた娘からは考えられない姿で横たわっていました。数日後、主治医からは極度の脱水による心停止であったこと、そこまでの脱水を起こさせた原因は不明であること、回復したとしても車椅子の角度が何度になるのか、食事や会話も恐らく無理でしょう、等の告知を受けました。このときまだイエス様を知らなかった主人の心情はどれほどのものであったのか、とても計り知ることはできません。絶望の中、二人で暗い待合室に座り祈りました。祈る言葉を失っていた私の心に静かにみことばが浮かんできました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

この頃の私は、神様にはできないことはない、必ずやあの少女（マルコの福音書5章に記されている、イエス様から救い起こされた娘）のように佑香の手を取って起き上がらせてくださり、もう一度あの愛おしい笑顔を見せてくださるはずだと信じることで、何とか自分自身を保っていました。しかし退院の日、帰りの車中、身じろぎ一つしない娘を抱きながら、流れ出る涙を抑えることはできませんでした。最も助けを必要としている今このときに、どうして主は手を差し伸べてくださらないのかと。いくら問うても答えはなく、聖書のみことばを読んでも、わずかの平安も慰めも得られませんでした。

あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

（イザヤ　59・2）

日が経つにつれ、元気な佑香は二度と戻らないのだと悟り、私の中の神様に対する信頼はすっかり崩れ、自分自身も壊れていきました。他の子が「お母さん」と呼ぶ声を聞くたびに喉が詰まり、肝臓が締め付けられました。あのときに血液検査さえしておけばと後悔し、医師のずさんな扱いに憤慨し、我が子をこのような姿にしてしまったのは母親の自分だと責め立て、ついには、この私が生まれてさえいなければ、と絶望に嘆くありさまでした。

しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。

（ローマ　9・20）

その後、一年も経たない間に、急性虫垂炎、ネフローゼ症と佑香への更なる試練が与えられました。初めの病気以来、私の実家に移り住んでから約三年半、家族だけの朝夕の礼拝と祈りの日々が続きました。主に見捨てられ、路頭に迷う暮らしがこんなにも辛いとは、このことがなければ知ることはなかっ

たでしょう。家族が各々の苦悩の内にあったある日、突然父が『光よあれ』の本を見せながら、「ここに行ってみる」と言い、早速、日曜日にキリスト集会へと出かけていきました。その日から毎週集い始めた父でしたが、帰宅後の表情は明るさを帯び、集会でのことを話す父のことばに、イエス様に飢え渇いていた私は耳をそばだてて聞き入りました。そのうち、キリスト集会から兄弟姉妹が訪問され、賛美やお祈りのお交わりをいただきました。その中である兄弟が、「佑香ちゃんのことはイエス様の責任ですよ」とおっしゃり、硬く握手を交わしてくださった瞬間、私の中に重く硬く沈みこんでいたものが、サーと音を立てるように流れ出し、暖かいものが広がり満ちていきました。よくはわからないけれど、揺るぎない中を歩みたいとの思いが湧き上がり、それが私の願いとなっていきました。

「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖う主は仰せられる。　（イザヤ　54・7～8）

問もなく母に与えられた肺腺癌の病を機に、キリスト集会へ集い始めました。そこには様々な苦しみや困難な中にありながらも、心から主を喜び賛美する人々の姿がありました。その中で共にみことばに触れ過ごしていくうちに、イエス様は静かに御自身をお示しくださいました。主のふところに入れていただいたような安堵感、あれほど求めても許され得なかった平安と慰めで、潰れた私の心を満たしてくださいました。創り主なるお方は、私の浅はかな思いを遥かに超え、すべてに満ち満ちておられました。そして、神を知っている、信じていると思うところに存在する、大きな大きな罪、無知ゆえに犯してきた数々の罪が示し出され、悔い改めへと導かれました。

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。　（ヨブ　42・5～6）

主の御心は娘の病を癒すことではなく、家族ひとりひとりの魂をお救いになることでありました。主をおそれ、悔い改めて、平安の中を歩むようにと。すべてが主のご計画であり最善であることを、体験を通してお示しくださいました。

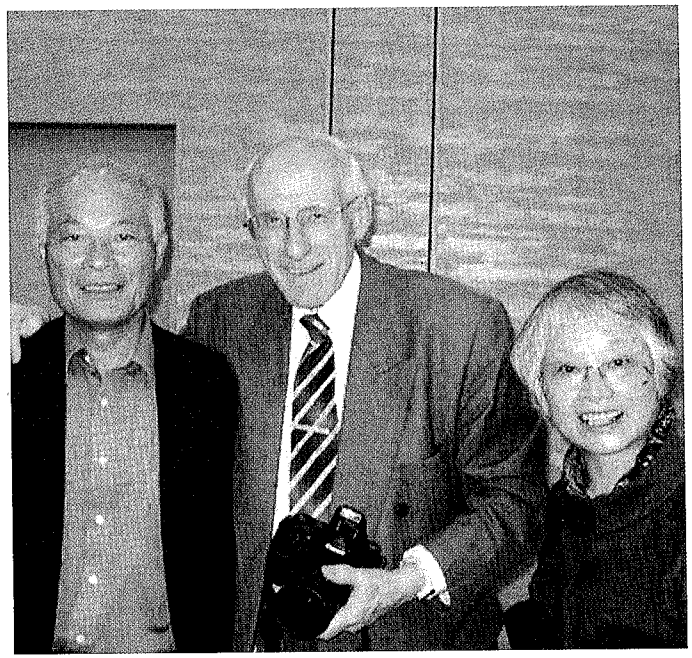
その後、主人にもてんかんの病が与えられました。ベック兄とのお交わりや沖縄喜びの集いに参加しながらも、みことばや集会の話を避けるように過ごしていた主人でしたが、頭痛と薬の副作用に悩まされ続け、ついには開眼できぬほどに顔が腫れ上がり、食事もろくに摂れなかった病床でイエス様と出会ったのでした。その一年後、熱心な祖先崇拝者であった主人の両親もイエス様を信じる者へと変えられました。孫の病を機に一つとされた私の両親、父方の伯父夫婦、母方の叔父、また、すっかりイエス様から離れていた唯一の姉とその家族、肉親が次々にイエス様のもとへと導かれました。真の羊飼いのもとに集められ、主と憩う恵みが各々に与えられたことを心から感謝します。

あれから十年、佑香は特別支援学校に通う中学一年生に成長しました。ここまでくることができたのは、イエス様以外にはまったく考えられません。娘の寝たきりの体は、人体の自然の法則に従って変形、歪み、脱臼と、現実の苦痛はまだ止むことはありません。しかし、閉じ込められた心の奥でイエス様が直接、佑香とお交わりくださり持ち運んでくださっていることと思います。地上の苦しみから解放された天国での娘の姿を想うと、「主よ、早く早く来たりませ」と切実に願わずにはおられません。そのときまでは、現在のことも将来のことも丸ごとイエス様にお委ねして、何とか到達できればと願っています。日々、生きるようにと弱い私に希望をお与えくださるイエス様に心から感謝しつつ、賛美しつつ歩み続けたいと思います。

新城祥子／一九七三年沖縄県生まれ。三育学院短期大学看護学科卒
夫・直仁、佑香（長女）、祐仁（長男）

これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである

竹田　保洋



左が保洋さん、ベックさん、妻の厚子さんと

私は一九四二年、鹿児島県北部と熊本県南部天草との間に位置する長島で六人兄弟（弟と妹四人）の長男として生まれました。当時は、中学校を卒業すると六～七割は就職のために島を出ておりました。私は島にある定時制高校へ進学しましたが、長男でもあるため、島を出ることは考えもしませんでした。ところが卒業式を待つばかりという時期に、突然父から「大阪で二～三年働いてこないか」と言われました。大阪にいる自分の教え子（父は小学校で代用教員をしておりました）に頼んで就職先を決めてきた、と言うのです。それでは弟が高校卒業するまで、という条件付きで大阪へ行くことにしました。ところが弟は、地元でミカン栽培をすると決め、私はそのまま大阪に留まることになりました。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

（ヨハネ　15・16）

一九七〇年四月、結婚しました。親同士が決めた結婚でした

が、家内は「大阪なら教会がある。教会へ行って神様のことを知りたい」と思って承諾したそうです。結婚生活が始まるとすぐに、家内は教会へ行くようになりました。そして、突然、「今日はイエス様を信じてきたから」と告げられました。私は何がなんだか分からず「教会？　キリスト？　イエス様？」と戸惑いました。ただ、長島に帰る可能性もあると思っていましたので、「長島に帰ったら仏教だよ」と言ったことだけ覚えています。家内は教会へ通い続け、数か月後にはアメリカ人宣教師から、「奥さんの洗礼式がありますから来てください」と言われました。私はどういうところか見てみよう、と初めて教会に行きましたが、みことばを聞いても何もわからず、感じることもありませんでした。

その後も、宣教師から教会行事への誘いをたびたび受け、子守りのつもりで行っていましたが、「信仰」や「キリスト」にはまったく興味がなく、自分とは関係ないと思っていました。

一九七三年に豊中市へ転勤になりました。これで教会との縁は切れるだろうと思い、ほっとしました。ところが、家内は宣教師から紹介された近くの教会にまた通い始めました。年末に宣教師が来られて、「正月は何をして過ごしますか」と尋ねられたので、「別に予定はないです」と答えますと、「琵琶湖にスキーに行きませんか」と誘われました。

琵琶湖に着いたら雪はまったくなく、どう過ごすか思案していたら、宣教師の方が来て、「竹田さん、雪がなくて残念でしたね。しかし素晴らしいことがありますから」と、関西のバプテスト教会の合同キャンプに誘われました。しかたなくキャンプに参加し、聖書のみことばを聞くことになりました。

そのときのみことばは、ルカ伝16章のラザロと金持ちの話でした。

ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという全身おできの貧乏人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。さて、この貧乏人は死んで、御使いたち

によってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。「父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。」

アブラハムは言った。「子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。それればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。」（ルカ 16・19〜26）

それまでは聖書の話を聞いても他人事のようで全然わからず、人は死んだらそれで終わりだ、自分には仏教もキリスト教も関係ないと思っていました。また、聖書で言う「罪」の意味がよく分かりませんでした。しかし、この日、死は終わりではない、ということを受けとめられました。そして日曜日の礼拝で、信じる決心を皆さんの前ですることができたのです。結婚して五年くらいたっていました。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。（ローマ 5・8）

それから、私も教会へ行くようになり、そこで高校教師のご家族と出会いました。その方から、自宅の近くに空き家があるので引越して来ませんかと誘われ、見に行きますと、教会に歩いて行ける距離で、環境も良かったので、引越すことにしました。それからは毎日のようにそのご家族と交わり、教会の若い兄弟姉妹が遊びにきては食事の交わりを持つ家となりました。そして十二月のクリスマス集会で、私は洗礼を受けました。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。（ローマ 6・4）

前述の兄弟は、高校教師を辞めて神学校へ行き、卒業後どこで開拓伝道をするべきか祈っておられ、教会でもそれが祈りの課題になっていました。そのようなとき、その兄弟から「竹田さんのふるさと長島で開拓伝道を始めたい」と言われ、その準備が始まりました。

兄弟家族が私たちのふるさとに開拓伝道に行かれるなら、私たちも一緒に帰ろうと決心しました。長島での仕事が決まっていないまま退社の意思を告げると、「普通、次の仕事を見つけてから辞めるものだ」と呆れられました。長島の実家でも帰ることには反対で、帰るならキリストを捨てて帰って来い、と言われました。いざ長島へ帰る準備が始まると、不安と寂しさもありましたが、主はすべてのことを導き守ってくださると信じて帰りました。

それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、風が向かい風なので、波に悩まされていた。すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。

しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。

ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出

し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝んで、「確かにあなたは神の子です。」と言った。

（マタイ　14・22〜33）

長島に着くと、弟と母が引越しを手伝ってくれました。数日後、牧師家族も長島へ到着し、我が家を長島で初の教会として看板を掲げ、伝道が始まりました。

一九九一年、長島伝道10周年記念集会を計画準備していたときでした。吉祥寺キリスト集会の情報が入り、また、神戸の小山姉妹が長島まで来てくださって家内と交わりを持ってくださり、その交わりの中で教会とキリスト集会の違いを示されて、キリスト集会へ行ってみようということになりました。その週末に大牟田で喜びの集いがあると聞いて、さっそく大牟田喜びの集いに行きました。

教会では、日曜日に教会へ行くことが忠実なクリスチャンとされています。決まった人が司会をして、決まった人が祈って、牧師の説教を聴いて終わり。しかし、この集会は、いろいろな制約もなく、ただ魂の救いが中心であり、礼拝ではそれぞれ示された者がみことばを読んで祈り、賛美のリクエストがあり、最後に兄弟からみことばが語られる。祈りのリクエストや、家族の救いのための祈りの要請、救われてほしい人の訪問など、すべてが、聖書に従った者の集まりであることがわかりました。このときから毎週、鹿児島、小林、宮崎、熊本の各地の集会に集い始めました。往復で五時間から八時間の行程ですが、心の喜びがあったため苦にはなりませんでした。

私の母は、後を継いだ弟家族の助けをもらいながら、離れで一人で自炊して暮らしていました。晩年は膝の痛みはありましたが、シニアカー（高齢者四輪者）に乗っては我が家を毎日のように訪れていました。二〇〇七年には福岡の喜びの集いに参加して、ベック兄と交わることもできました。月に一度、我が家で行われる礼拝にも集い、歌が好きな母は大きな声で賛美し、「次は？次は？」と賛美の催促をするほどでした。集会の兄弟姉妹にも愛され、母もみなさんとの交わりを楽しんでいました。

その母が急にお腹の調子が悪いと言うので病院に行ったところ、大腸がんと診断されました。母は痴呆もなくしっかりしておりましたので、死後のことも、「私は死んでも行き先がわかっているから」と病院でも皆に言っていました。葬儀についても、「もし自分が死んだときは、保洋にキリスト式でしてもらうから」と自分で弟嫁に、はっきりと伝えました。私もそのときはびっくりしました。そして二〇二年二月、苦しみもなく平安な顔で母は天国に召されました。福岡、鹿児島、宮崎、熊本の兄姉によって、長島の斎場で初めてキリスト集会の葬儀が行なわれました。前夜式、召天式には、二百名を超える方が来てくださりみことばを聞いてくださいました。

いつも、母が口にしていたみことばで終わります。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。」

（ヨハネ　11・25〜26）

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

竹田保洋／一九四二年　鹿児島県出水郡長島町生まれ
妻・厚子、長女・知美、長男・献一

主の愛の御手に導かれて

竹田　厚子



奥からご主人の保洋さん、厚子さん、みなさんと

わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。

（イザヤ　48・17）

私は、鹿児島県の最北の島「長島」に一九四〇年に生まれました。小学校に入学する前に、太平洋戦争が始まり、島にもB29が飛んできていました。

父は出征しており、祖父母、母、三歳違いの姉と共に暮らしていました。終戦後、父の戦死の知らせがあり、見たことも、その声すら聴いたことも記憶にない父の葬儀があり、皆が集まって悲しんでいるのに、それを共有できない自分がいたことを覚えています。

小学校は二十歩ほど歩いたところでしたが、中学校は四キロも離れていました。祖父母は遠いことを心配したのか、バスで通学させてくれました。バスは東シナ海が一望できるところを走っており、それはそれはすばらしい景色で、私の心はこの海を眺めるといつも癒され、「ほぉっ」とした思いになり、この海の波を動かしオレンジ色になって「ぽかっ」と沈む夕日を造られた方は、ただおひとりのような気がしていました。

わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。このわたしが地を造り、その上に人間を創造した。

（イザヤ　45・5、12）

後になって、この聖句を読んだとき、どんなに嬉しかったことか、言葉で言い表すことができないほどでした。

高校時代は鹿児島市内で寮生活。卒業後、島へ帰って役場に勤めましたが、自分の生まれてきた目的がわからず、心は渇きを覚え、何をしても満足がいかず、自分の存在目的は何か…と思いめぐらしていました。このままでは嫌だと思い、国家試験を受け保母になりました。幼い子どもは可愛く、昼間はどうにか紛れるのですが、一人になると心の奥底は悶々として、行くあてもない舟に乗りただ揺れているだけのような生活をしていました。

そのようなとき、ラジオからは朝六時ごろの五分間だけ「世の光」の放送が流れており、聖書のお話が聞けることが嬉しく、島外の教会にも足を運んでみたりしました。しかし心は癒されることはなく、やはりカラカラしておりました。

このようなとき、同じ島出身の主人との結婚話があり、「この人は大阪にいるのだから、聖書の話を聞けるチャンスが広がる。教会に行きたい」という思いで結婚しました。そして枚方の文化会館の一室の前で、「あなたも婦人会にいらっしゃいませんか」というポスターに出会いました。そこに記されていたみことばは、「自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。（マタイ6・20）」でした。

このポスターを読んで嬉しくなり、同じアパートの土井さんという方に声をかけてみました。するとその方が「私たちは天王寺の教会で結婚式をあげたのよ」とのことで、それから毎週日曜日になると私たちは礼拝に集うことになりました。アメリカ人の宣教師五人、伝道師のアメリカ人女性一人、日本人数人の集まりで、賛美、説教がありましたが、私は罪が赦されている

確信がありませんでした。そんなとき自宅で聖書を読んでいたら、「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（1ヨハネ　1・9）のみことばに出会い、思い出されるかぎりのすべての罪をイエス様に告白し、本当に肩の荷を下ろしたように軽くなり、小さな花々、そよ吹く風、山々、何を見ても美しく楽しく表現できないような嬉しさで一杯になりました。

その後、長女（知美）を授かり、神様のすばらしいプレゼントに感動しました。「私は感謝します。あなたは私に奇しいことをなさって恐ろしいほどです」と心から主にほめ歌を歌わずにはおられませんでした。

宣教師からバプテスマのすすめを受け、家で主人に話すと「家には仏教があるではないか」と言われ、「これまで家の仏教があったけれど、今いただいているような喜びも平安も希望も感謝もわいてこない。仏教が私にそれを与えてくれるなら、バプテスマを止めてもいいよ」というような会話をしたように思います。主人は黙ってしまい、私と土井さんの洗礼式に来てくれました。

また、地元長島の中学校時代の同級生とも出会わせていただき、この姉妹とのお交わりは私の信仰の助けになり感謝しました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。
（伝道者　3・11）

主は、弱い私をいろいろな面で細かく配慮し、支え励ましてくださっていたことを覚え、感謝せずにはいられません。

主人の転勤に伴い、豊中市に引っ越し千里の教会に集わせていただいておりました。そのとき主の憐れみで主人も信仰を持つことができ、また、長男誕生と、感謝してもしきれない嬉しさでいっぱいでした。唯一の方にささげる、との思いで長男は「献一」と命名しました。献一のお産の手伝いに母が長島から来てくれ、主との出会いがありました。大正八年（一九一九年）生まれの母は戦争未亡人で、とても苦労して私たち二人の娘を愛し育ててくれました。晩年は痴呆のため特老に入りましたが、私が賛美し祈ると、母は二言二言の祈りの言葉に「アーメン、アーメン」を連発しておりました。（母は二〇一二年に召天）

しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。
（ルカ　10・42）

主人は、自分の生まれた長島への重荷を共に担ってくださるという神学生との出会いを通し、長島へ帰る決心をし、一九八一年にその方の家族六人と私たち家族四人で長島へ帰ってまいりました。実のところを言えば私は帰りたくありませんでした。人々の目ばかりを意識して生活するような所ですから、心は重く嫌でした。

なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。
（ヨハネ　6・27）

そんなとき、このみことばによって、私の好き嫌いが大切ではないことを示されました。また何よりも、私の愛する人々のいる島だ、と思わされました。長女が四年生、長男が二歳のときでした。主人は仕事を辞めて収入のない状態で帰るわけですから生活の心配もありました。私は長女に尋ねました。「長島へ帰ってもいいかな～。お父さんは仕事もないのだけど…。でも長島は山へ行けば山菜も取れるし、海へ行けば貝もあるのよ。お母さんはそれを知っているし、取ることができるのよ」と言うと、長女はピクニックにでも出かけるかのように「行く」と楽しそうに答え、島へ帰る決心をして帰ってきました。反対していた主人の父もいますのに、母は私たち家族に気配りしてくれたことを本当に感謝しています。主人の母は晩年に明確な救いの確信が与えられ、跡取りでもない主人が喪主になって葬儀をすることができました。福岡、熊本、鹿児島、宮崎の兄姉が集ってくださり、母が天国に凱旋することができたことは、この上ない主の祝福であったとこを深く感謝します。

島での教会生活は当初は物珍（ものめずら）しさもあったのでしょう。日曜学校には、バスで送迎される多くの子どもたち、

そして大人の方々も集まってきてくれましたが、十年もたつとだんだんと少なくなっていきました。主人の伯母と、それに島の方が数人となりました。私も魂の渇きをどうすることもできなくなり、以前読んだことのある「実を結ぶ命」の本をまた読み返し、このような純粋な信仰がほしい！と渇望し、思い悩む日々が続いておりました。

そのころ我が家では、幾人かのお子さんをお預かりしておりました。そのうちのひとりのお母様が、ご自分は集会に集っているわけでもないのに、「光よあれ」の本やメッセージテープ、証しなどたくさん送ってくださいました。私は、ここに希望があるかも、と思わされ、教会に除籍届けを出し、集会に集うことにしました。往復五時間ほどの鹿児島集会や、それ以上に遠い宮崎、小林、大牟田、福岡といろいろな所へ主人は車を走らせてくれました。更年期障害で体の不具合をかかえている私には移動はつらいものでしたが、大好きなイエス様から離れることはできないとの思いで、集会に集いました。愛する兄姉の祈りと、生きて働いてくださる主のご臨在、「しなければならない」からの解放など、愛と慈しみをもって導き、あふれる祝福を与えていただいたことは主の憐れみにほかなりません。

永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。

（エレミヤ　31・3）

集会はイエス様だけを中心に礼拝が行なわれ、悔い改め、感謝と賛美の祈りがあります。様々な職業に就いておられる兄弟たちが、神学校で学んだわけではないのに、実生活を通して聖書から教えられたことを聖霊様に導かれ伝えてくださいます。主の愛を伝えるため遠い地方まで足を運んでくださる兄弟と、送り出してくださるご家族のご奉仕に心から感謝し、私たちは集会に出席させていただいております。

主は、私の四十二年間の信仰生活を真実をもって導き、励まし支えてくださっています。かつて私が唯一の神様の存在を思わせていただいた海の見える丘の上に、主は不思議な方法で土地を与え、家を建ててくださいました。雲仙天草国立公園を望むすばらしい眺め、海に浮かぶ島々、オレンジ色になってポトン‥と沈む夕日、空と海もオレンジ色に染める景色‥主に思いを馳せつつ聖歌622番「夕べ雲やくる」が思わず唇から出てしまうほどです。

頼れるのはイエス様だけでしたけれど、豊かな島には豊かな人の幸もあり、子育ての真っ最中も主はいつも満ち足りるようにしてくださり、ひもじい思いはさせられませんでした。

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。

（ピリピ　4・19）

主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。すべて主を愛する者は主が守られる。

（詩篇　145・19〜20）

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。

（詩篇　103・1〜5）

残された人生は、これからもいろいろな問題が起こると思いますが、主を見上げ、主に頼り、主に祈ってすべてのことを主から受け取って、主にお任せして、再臨なさる主を待ち望みつつ生かしていただきたい、と願っています。

竹田厚子／一九四〇年　鹿児島県長島に生まれる
一九七〇年　結婚　主を受け入れる
一九八二年　長島へ帰る
一九九二年　キリスト集会へ導かれる
夫・保洋、長女・長男

神と共に歩む人生に変えられて

山口 一郎



妻の寿子さんと

前回（「主は生きておられる」第10号）の証しでは、私が初めてキリスト集会に集ったとき、主なるイエス様が単なる偶像の神ではなく、私たちの毎日の生活の中で身近に生きて働いておられるという所までお話しさせていただきました。今回は、救われた後の信仰生活の歩みの中で、イエス様が具体的にどのように深く私にかかわってくださっているかについて、お話しさせていただきます。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。―主の御告げ。―天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

（イザヤ　55・8～9）

1　自宅が礼拝所、集会所として用いられたこと

十七年前に鹿嶋に移転してきたとき、私が目論んでいたことは、新しい環境の下で、苦しかったサラリーマン生活と決別し、新たな教員生活に入り、心機一転、健康の許す限り教師の仕事を続けると共に、礼拝や福音集会に関しては、自宅から一番近い集会に集うというものでした。

最寄りの集会所はどこでしょうか、とベック兄に尋ねたところ、兄弟は少し沈黙された後、次のように言われました。「一郎がいて、寿子がいて、お父さん（私の父）がいて、恭子（寿子の妹）がいて、神様がいて、聖霊様がいて、イエス様がいれば、全部で七人だよね。だったら、一郎の家で礼拝を持てばいい。家庭集会も一郎の家でやったらどう」

私は正直、この言葉にびっくりしましたが、結局のところ「はい、わかりました。そうします」と返事するのが精一杯でした。こうして鹿嶋で礼拝が始まりました。

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。

（2コリント　5・1）

2　妻の二度目の病気

鹿嶋に引っ越してきてから間もなく、妻に二度目の乳癌がみつかりました。その前には、急性腹膜炎という病も与えられ、姉妹は本当に茨の道を歩まざるを得ませんでした。私たちは、「主にすべてをお任せし、これからのこと一切を主にお委ねします。最善の道を私たちに示してください」と必死に祈りました。幸いにも、主のあわれみで、妻は今日まで主の愛のうちに生かされております。感謝な気持で一杯です。

私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

（ヤコブ　1・2～3、12）

3　父との別れ

鹿嶋に転居した翌年、一九九八年六月に、父は召天しましたが、それまでの私は、自分を生んでくれ、育ててくれた父を心から愛せずにおりました。父は私に冷たく、怖い存在でした。その父も肺気腫で倒れ、ベック兄と病室で交わってからは、次第に柔和になり、主イエス様を受け入れ、聖書も旧約から新約まで二回も通読したそうです。父が召天する直前に、私たち夫婦は病室で立ちあうことができました。そのとき、父は痩せ細った両方の手を私と妻に向けて差し出し、握り締めたのです。

私は父に、「お父さん。聞こえますか。僕を許してくれますか。僕のこれまでの親不孝を許してください。ずっと心配と迷惑ばかりをかけ、本当にお父さんの期待に添うことができずに、愚かな息子でした。ごめんなさい」と、初めて心から詫びることができたのです。父はもう声も出なかったのですが、握った私の手に力が加わったのがはっきりとわかりました。こうして、憎しみと恨みで築かれていた、長く冷たい親子の関係は、臨終間際で終了し、神は見事に父との和解をもたらしてくださり、神の栄光を私たち夫婦に現してくださったのです。

4　学校からの離別

神から与えられた学校生活は、私にとって本当に充実した楽しいものでした。自分の好きな教科を生徒に教える喜び、先生たちとの交流、課外活動を通しての生徒や親との触れ合いなど、生きがいのある職場を与えられたと感謝することができました。わずかな期間でありましたが、不登校していた次男も同じ学校に通学することができ、一時は野球部にも所属し、親子で幸せな時間をいただきました。

ところが、神の遠大なるご計画は、私の思いとは遥かに異なっていたのです。何と勤務してわずか二年後に、学校の経営者が突然変わり、校長以下教員のほぼ全員が辞職しなければならない事態が起こったのです。このことは、まったく予測すらしていなかったことで、自分の描いていた人生設計そのものを根底から覆すものでした。

でも、今はこれも神のご計画であった、このことを通して私がごう慢にならないように導いてくださったと感謝できます。

5　二人の息子のこと

わずか二年で学校を辞めてからは、予備校や塾で講師として、また自宅で生徒を教えることで何とか生計を立てていました。この間、長男の昌俊は、高校卒業後、音楽の道を模索していましたが、達成できずに、三年ほど家にこもっていました。

鹿嶋でしばらく親と暮らしていましたが、同居生活はこれ以上は無理だと思ったのでしょうか、自分から自立の道に踏み出したいと、体調不良を訴えながらも東京に残されていた父の実家に一人帰っていきました。このときほどつらかったことはありませんでした。親としてこれ以上面倒を見ることもできずに、ただ神の御手に委ねるほか仕方がありませんでした。今は、主を受け入れてくれる日が早く来るように祈っております。

次男の泰史は、高校を卒業後、工業系の大学に進学しましたが、二年の進級時に自分から突然退学してしまいました。専門学校卒業後、大手のホテルに正社員として就職しましたが、現在は障害者福祉事業所で働いております。

彼は小学生のときに教会でイエス様と出会い、主を受け入れましたが、学校でいじめにあってからは登校拒否となり、家に閉じこもるようになりました。その後、母親の大病を通して、キリスト集会に導かれ、彼の内側にも徐々に変化が見られるようになりました。男の子としての強い心が与えられたと思っています。主のあわれみによるとしか言いようがありません。

二〇〇九年春に御代田でベック兄の司式のもと、挙式させてもらう恵みも授かり、今は二人の子どもの父親となっております。

二人の息子に起きた、これらの出来事も私の予想外の展開でした。しかし、すべてのことに偶然はなく、主が息子たちの救いと立ち返りのために、確かなご計画をもって働かれている、と受け入れることができますので、本当に感謝です。

神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。（2テモテ　1・9）

6　水戸への転居

二人の息子が家を出た後、私たちは夫婦二人きりの生活となりました。毎日曜日の礼拝と家庭集会の日が、二人にとって待ち遠しいものになっていきました。

そんな中で、たまたま水戸の病院に入院中の叔父を見舞ったとき突然、叔父から、「一郎君。一人で暮している、あなたの義母の世話をする気はないか。お義母さんは将来のことを不安に思って大変寂しがっている。水戸に引っ越して、一緒に住んでくれるとありがたいのだがね」と尋ねられたのです。

しかし、自宅を日曜礼拝の場に提供している身で、移住するのは大きな問題です。夫婦で真剣に祈りましたが、最善の解決策は見つからず、時間ばかりが過ぎて行きました。

ベック兄に相談したところ、「一郎。鹿嶋集会の灯は消さないよ」と、一言だけ言われました。しばらくの沈黙が流れましたが、私はその言葉に触発されたかのように、次のように返事してしまったのです。

「ベックさん。折角わが家を主のご用のために用いてくださったのに、主と兄弟の意向に添うことができなくて、本当に申し訳ありません。その代わりに、私たちが毎日曜日、水戸から鹿嶋に行って礼拝を守ります。母を連れて三人で礼拝に行かせてください」と、お願いしたところ、兄弟は、「鹿嶋の家はどうするの」と聞かれたので、「七年間、主のために用いてくださったこの家のことについては、兄弟の深いあわれみによるものと、感謝しております。しかし、夫婦で祈った結果、妹の恭子の家族の救いも考えて、この家を妹に譲り、礼拝と集会は市内の公共施設を借りて行いたいという思いが示されたのですが、どうでしょうか」と答えました。ベック兄は、このとき、「そうねぇ‥」と言われましたが、私たちは、それを了解と受け取りました。

こうして、二〇〇四年二月に鹿嶋から水戸に引っ越しました。義母との同居生活が始まりました。当初は予想した通り、義母との生活は決して心中おだやかな、平穏なものではありませんでした。年齢や育ち方や性格や住む環境などの相違から生じる微妙な気持ちのズレが、お互いに現れることは仕方のないことかもしれません。しかし、幸いにも、最近では互いに相手の罪や欠点を認め、許し合うようになりました。

今は親子三人で祈り、相手に言い過ぎたと思ったときは、主イエス様に「ごめんなさい」と謝ることにしています。

人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。（箴言　20・24）

7　妻のこと

最後に、妻のことについて、お話しさせていただきます。

妻は地方の教員家庭の長女で、純情で素直な性格を持つ反面、考え方はしっかりしており、責任感の強い女性でした。私は、どちらかと言えば、すべてにずぼらで、いい加減な面がありましたので、私たちは夫婦としてうまくやっていけるのか、自信はなかったのですが、結婚に対して深い考えを持たないままで結婚しました。

当時の私は、非常にわがままで、自己中心のかたまりでした。楽しいはずの新婚家庭生活を持ったものの、夫としての自覚がまるで足りませんでした。飲み代やマージャン代の借金を重ね、不平不満を言っては会社を勝手に辞めるなど、妻には悲しみと苦しみを与えてばかりいました。水戸から東京に嫁いできた当初は、誰一人親しい友人もなく、悩みを聞いてくれる人もなく、あげくには、私の母である姑からも色々といじめにあっていたようです。それでも彼女は、気丈にも、こうした苦難に一人耐え抜き、崩壊しかかっていた生活と子育てを守り通しました。

私に愛想を尽かして、とっくに離婚を申し出てもおかしくない状態であったのに、彼女には離婚をするつもりはなかったようです。彼女の背後には主イエス様がおられ、しっかりと彼女を支えておられたのでしょう。その後しばらくして、私は、失業中で苦しみの中にいたとき、教会で主と出会い、悔い改め、初めて妻に心から謝ることができました。

その後しばらくして、八王子の病院に入院中の母を見舞ったとき、神は、一人のキリスト集会の姉妹との出会いを、私たち夫婦に備えてくださいました。これがきっかけとなり、私たちは集会へと導かれました。あるとき、ベック兄との交わりの中

で、彼女が「私はどうして、こんなに辛い人生を通らなければならないのでしょうか」と質問したところ、兄弟は、「寿子も」郎と結婚しなければ、主イエス様と出会えなかったでしょう」と、言われたそうです。

これまで私たちの上に起きたすべてのことは、すべて主なるイエス様の導きによるのです。主が私たちを導いてくださいますので、私たちは主の導きに素直に従うことが最善だと思っています。なぜなら、主の導きは完全であり、私たちに真の喜びと深い平安と慰めを与えるからです。

私のかつての人生は、イエス様から遠く背を向けて、絶望と不安と苦痛に満ちた暗黒の歩みでした。しかし今はイエス様にあって、その歩みが、私の魂の真の救いのためにどうしても通らねばならない道程であったことを知りました。そして、与えられた信仰の道程を主イエス様からの鞭と杖として、感謝の内に受け取ることができます。感謝です。主イエス様が聖霊様と共に私の中に生きておられ、私の生活の中に深くかかわってくださっていますので、とても嬉しいです。これからも、主が私の歩む道において、私の上にどのようなことをしてくださるのか、とても楽しみな毎日です。

山口一郎／一九四五年　広島県福山市生まれ、
東京都立大森高校卒、上智大学外国語学部スペイン語学科卒、
日製産業㈱、宝幸水産㈱、㈱日本ペプシコーラ・ボトラーズ勤務。
現在は無職。茨城県水戸市在住。
妻・寿子、長男・昌俊、次男・泰史（独立）、杉山澄子（義母）

神の愛とあわれみの中に生かされて

山口　寿子



中央が寿子さん、お孫さんたちと

私は一九四八年十一月に茨城県で生まれました。父は苦労人で教育者として懸命に仕事に励み、家族を支えてくれました。母は明るく健康にも恵まれ、よく父に仕えていました。

家庭的には大きな問題もなく、二つ下の妹とも仲がよく、比較的穏やかな子ども時代を過ごしました。そして、家を継ぐ長女でもあることから、二十代を過ぎて主人と出会うまでは、この恵まれた環境から離れたくないと思っていました。

初めて聖書に出会ったのは、高校に入学したときでした。小さな聖書と賛美歌集が生徒一人ひとりに手渡され、聖書の授業と礼拝の時間がありました。それまで見たこともない世界でした。広い緑の芝生に囲まれた洋風の建物や、アメリカから派遣された宣教師さんが珍しく、いま思えば、異国風の雰囲気にあこがれていたようです。

当時は、後になってイエス様の救いにあずかり、聖書のみことばが、「いのちのことば」となって満たしてくださるようになろうとは、想像もしていませんでした。ただ、その意味はまったくわかりませんでしたが、とても心に残り、ときおり思い出すみ

ことばがありました。「神は愛である」、「心の貧しい人たちは幸いである」、「天国は彼らのものである」などの聖句です。

十八歳のとき、母方の祖母が六十二歳で脳溢血で倒れ、そのまま亡くなりました。私はそのとき初めて、人は死んでいなくなるのだということを知り、喪失感とさびしさを覚えました。

その頃から、外側の自分と内側の自分の違いに悩むようになりました。表向きは明るく笑顔の絶えない自分が、内面には嫉妬心や反抗心をかかえ、恐れや不安を感じているのです。そして二十四歳のとき、出張で職場に来た主人と出会い、結婚して、東京都大田区に住むことになりました。近くには、主人の両親が住んでおりました。妻として、嫁としての自覚がないまま、慣れない環境で、価値観の違いや習慣の違いに戸惑いながらの出発でした。

主人は明るく、やさしい反面、心に何か秘めた悩みを持っているようで、私には主人の本心がつかめませんでした。いつも心ここにあらずという態度に、私の心も満たされませんでした。父親との確執があることは、ある程度わかりましたが、それがどんなに彼の心を蝕み、主人の人格に影響を及ぼしていたかは、わかりませんでした。また、どれほど父親の愛を望んでいたかも、当時は理解できませんでした。結婚してまもなく、道を踏み外した主人の行動が明らかになったときは、本当に失望しました。そして、主人への不信感と裁く思いは募るばかりでした。ときどき私に浴びせてくる罵声も、主人の弱さの現れであり、妻にだけはありのままの自分を愛してほしいという叫びだったと、いまは思えるようになりました。

義母は甲状腺の病気を患っていたこともあり、感情の起伏が激しく、生きがいだった一人息子の主人を私に奪われた、という寂しさからか、何かと私のいたらぬ点を口にすることがありました。しかし、結婚二年後に長男、七年後に次男を授かり、義父も義母も孫の誕生をとても喜んでくれました。主人は海外出張で、一年の半分以上をアラスカ、カナダに出掛けるという生活が続きました。

四十歳になった頃、私の胸にしこりが見つかり、検査の結果、乳癌と診断され、手術を受けました。その告知を一人で聞いたのですが、頭の中が真っ白になり、どのように家に帰ったのか、いまでも記憶がありません。長男が中学二年、次男が小学一年のときでした。私はそのときも主人や息子たちが突然の自分の病気でどんなに辛い思いをしていたか、考える余裕もなく、ただ、自分のことで精一杯でした。主人不在の中での子育ては不安で、心のより所を求めていたとき、知人から先祖供養を薦められ、お経を唱えていました。手術の前、仏教関係の人に、「なぜこのような病気になったのでしょうか」と尋ねたところ、因果応報との答えが帰ってきました。私はまったく心の平安を失い、より所としていたものがガラガラと崩れて行くのを感じていました。

偶像を造る者はみな、むなしい。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。

（イザヤ　44・9）

手術後、日常生活に戻り半年が過ぎた頃、再発の不安から怖い夢を見るようになりました。眠れない夜が続いていたとき、同じマンションに住むクリスチャンの友人がわが家に来てくださったので、その苦しみを打ち明けました。それまでは、イエス様のことを言われても、頑なに拒否していた私でしたが、その姉妹の祈りに素直に従いました。すると、涙がとめどもなく流れ、目を開けた瞬間、あたりは光輝き、まったく別世界に移されたようでした。味わったことのない平安と喜びに満たされました。その夜から不思議なことに、恐怖心がなくなり、眠れるようになりました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。　（ヨハネ3・16）

イエス様が私の罪のためにののしられ、苦しめられ、私の身代わりとなって罰せられ、十字架上で死んでくださったこと、三日目に蘇って私に永遠のいのちを与えてくださったこと、そして、天国でイエス様と永遠に生き続けられることを信じることがで

きました。

現実は、何も変わっていないのですが、嬉しくて嬉しくて仕方ありませんでした。長い間、迷路に入り込み、暗黒と孤独の中をさ迷っていた私の心の中に光となって入ってくださったのです。目には見えませんが、生きておられ、私と共にいつも一緒にいてくださるのです。聖書のみことばが、いのちの言葉となって私の心を満たしてくださいました。このとき、「神は愛なり」のみことば通り、私も神から愛されている一人だと確信しました。

私を救いに導いてくださったクリスチャンの方のご主人が、牧師となられ、五年ほど、私はその単立の小さな教会に集っていました。主人もまもなく教会へと導かれ、次男も日曜学校に通うようになりました。しばらくして、主人の失業、次男の不登校、義母の介護などが立て続けに起こりました。教会に通っているのに、なぜこんなに辛いことばかり起きるのかと、その理由と解決策を模索し、二重三重の苦しみに喘いでいました。この頃の私の信仰は幼く、自分の罪がどんなにひどいものであるかには、まだ気づいていなかったのかもしれません。

ある日、義母が入院していた八王子の病院に主人と二人で見舞い行ったときのことです。少し離れたベッドから、かすかに歌声が聞こえて来ました。主人が賛美歌だと気づいたので、歌っているご婦人に私たちは恐る恐る声をかけました。その方が、キリスト集会に集っていた北島幸子姉妹でした。

私は以前、牧師宅の書棚で「実を結ぶ命」と「光よあれ」を手に取り、読んだことがありました。本当に、ここには生きた信仰があると感じましたが、祈り支えてくださった牧師夫婦を裏切ることはできないと思いました。集会に行ってみる決心がなかなかつかず、悩む私に、姉妹は次のみことばを贈ってくださいました。

それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。…あなたの叫び声に応じて、主は必ずあなたに恵み、それを聞かれるとすぐ、あなたに答えてくださる。…あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。（イザヤ30・18、19、21）

ベック兄とのお交わりの中で、「私はどうしたら聖くなれるのでしょうか」とお尋ねすると、兄弟は、「正直でいいんだよ」と言われました。「主人の両親に対しても義務を果たすことばかりを考えて、心から愛せないのです」と告白しました。答えは一言、「お年寄りは本当は寂しんだよ。家族の救いが大切だよ」とおっしゃいました。そして、ベック兄といっしょにお祈りしたときは、涙が次から次へとあふれました。

こうして、一九九四年九月、私たちは吉祥寺集会の礼拝へと導かれました。主イエス様だけが中心であり、兄弟たちが次々と立ち上がり、霊と真をもって捧げる祈りと賛美が聖所に満ちあふれていました。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

（エペソ　1・23）

その後、義母はベック兄のお見舞いを戴き、喜びを顔一杯に表しました。イエス様は、私と義母との間に和解も与えてくださいました。義母は、ある日、突然起き上がり、「私は死んだら、どこに行くのかね」と叫んだことがありました。私は、「お母さん。イエス様にお祈りすると、天国に入れるんだって」と話しますと、「私にも教えて。そして山口家をあなたが変えなさい」と言ってくれたのです。さらに、義母の方から、「ごめんね。寿子さん。これからも一郎を頼むね」と、私より先に言われてしまいました。私の方こそ至らぬ嫁であったことを心から謝ることができました。

一九九四年十二月十九日、義母は病院でのクリスマス会の日に天に召されました。その義母の顔はこの世の苦しみから解放され、平安に満ちていました。

その後、一九九七年二月に私たち家族は、長男だけを一人東京に残し、義父と次男との四人で鹿嶋に移り住みました。鹿嶋には妹家族が住んでおりました。先には何があるのか予想はできませんでしたが、主に信頼し、主人と祈り続けました。そして鹿嶋での約七年間、イエス様からあふれるばかりの霊的な祝福

と共に、色々な訓練も戴きました。私たちの自我を砕き、主イエス様だけにより頼む者となるために、それが必要だったことが後になってわかりました。

現在は、私の生まれ故郷である水戸で、母と主人と私の三人で生活しています。

私の父も十七年の間パーキンソン症候群という病と戦いながら、主イエス様と出会い、救われました。二〇〇四年六月、父は眠るように天に召されました。父は病を通してくだかれ、晩年は主のやさしいまなざしの中で生かされていたと思います。

母は、父の介護も終わり、私たちと一緒に鹿嶋の礼拝に集うようになりました。往復三時間のドライブを喜んでおり、鹿嶋の礼拝に参加することが楽しみとなりました。印旛・鹿嶋集会の兄弟姉妹から、「水戸のお母さん」と呼ばれ、大切にして戴いております。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。（詩篇　133・1）

家族こそが信仰の実践の場であり、この十年、日々の生活の中で、主イエス様が私たち一人ひとりに語ってくださっております。主人は母にとてもやさしくしてくれ、私のことも大切にしてくれます。なによりも、三人の共通の土台はイエス様です。昔から、私は母が大好きで、それまで叱られたという記憶はありません。信仰もあるし、私たち親子の関係は大丈夫と思っていました。

あなたの年老いた母をさげすんではならない。（箴言　23・22）

しかし、歳を重ね心身ともに弱っていく母と、病弱な私との間に波風が立つのです。ときには私の心の中に嵐がおこるのです。私は母の言っていること、教えようとしていることに直ぐに反発してしまい、素直に従えないのです。夫に対してもそうでした。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。（エペソ　5・22）

このみことばを知っていても、まったく夫に従っていない私に、ある日のこと交わりの中で、一人の兄弟から、思いがけない言葉が返ってきたのです。「寿子姉妹がいつも振り回しているのではないの?」と。私は耳を疑い、平静を失いました。私を慰めてくださると思っていたからです。しかし、このことで主人との祈りへと導かれました。傲慢や高ぶり、裁き、ねたみなどに支配されたみじめな自分の姿が光に照らされた塵のように、目の前に映し出されました。「イエス様。ごめんなさい。こんな私でも愛してくださって、ありがとうございます」と祈りました。そして、次のみことばが心に響いてきました。

しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。（マタイ　6・15）

イエス様に心から感謝し、主人に謝りました。長い間、どうしても消し去ることができなかった、私の心の重荷を主イエス様が、取り去ってくださいました。

長い間、愚かでわきまえのない私のために、祈り続けてくださっている主イエス様と兄弟姉妹に心から感謝致します。まだイエス様を受け入れていない長男も、イエス様のプレゼントを受け取る日が約束されていますので、感謝して主人と共に祈り続けています。

山口寿子／一九四八年　茨城県水戸市生まれ
茨城キリスト教学園高等学校、同短期大学英語科卒、茨城県水戸市在住
夫・一郎、長男・昌俊、次男・泰史、　杉山澄子（母）

主からいただいた恵み

上田　勝巳



左から勝巳さん、妻の康代さん、友人の久田麻由香さん、長女の容子さん、長男の典広さん

私は三重県宇治山田市（現・伊勢市）で商業高校を卒業して、先に尼崎に転居していた母親の元に行きました。父親は、私が四歳の頃、終戦の前に病死していました。

高校卒業後、五つの会社を転職して、二十六歳で入社した会社で名古屋、静岡、長野、東京、大宮と勤務し、東京の池袋で定年を迎えました。二十九歳の時に、同僚であった家内と結婚し、息子、娘が与えられました。

一九七七年に長野勤務となり、その頃に教会へ行き始めました。教会に通っていた家内から誘われたのがきっかけです。当時の私は上司との折り合いが悪く、毎日暗い顔をして帰ってくる私を見て、家内は「教会へ行ってみない」と声をかけてくれたのでした。

イエス様が磔（はりつけ）になって死なれたことくらいしか知らなかった私は、誘われるままに行き始めました。その教会では、聖霊のこともイエス様のことも教えてくれませんでした。牧師の説教もわかりませんでしたし、聖書を読むこともなく過ごしていました。半年くらいたって東京への転勤が決まり、「その前に洗礼を」と言われて、洗礼の意味もわからないまま滴礼を受けました。罪のこと、救いのことは何もわかっていませんでした。

息子は高校三年生になった時でしたので、卒業するまで家内と長野に残ることになり、私は高校に入学したばかりの娘と浦和に転居しました。娘は、近くの高校へと転校しました。一年後、家内は浦和へ、息子は前橋の近くにある自動車専門学校に入学して一人暮らしを始めました。

家内は近くの教会を探し始めましたが、ふさわしい教会が見つからなかったようでした。そんな折、何かの用事で我が家に来られた隣りの方が、近所でもたれる家庭集会に誘ってくださいました。家内は、不安もあったようですが、その家庭集会で「イエス様が生きて働いておられる」と思わされ、「ここなら」と、次の日曜日から吉祥寺の礼拝へ出るようになりました。

家内を誘ってくださった方は、吉祥寺集会の姉妹でした。しかも歩いて数分のところに浦和家庭集会のお宅があったのです。主が導いてくださった、としか考えられません。ただ感謝あるのみです。

私の方は、折り合いが悪かった上司と離れたことで気分が楽になったうえ、求めて教会へ行き始めたわけでもなかったため、吉祥寺集会へは行かずにいました。しかしその夏に、「軽井沢でキャンプがあるのだけれど、行ってみない」という誘いがあり、軽井沢は私の仕事場でもあった所なので、懐かしさもあって出かけてみました。この時、初めて集会に参加し、次の日曜日から家内と二人で吉祥寺の礼拝に集うようになりました。私は二回目の軽井沢キャンプの時に、朝の集会が始まる前にベック兄と車の中でお交わりをいただきました。詳しい内容はよく覚えていませんが、ベック兄の言われた「祈りなさい」、「聖書を読みなさい」、「とりなしの祈りをしなさい」、「交わりなさい」の四つの勧めは今も忘れていません。

東京転勤の二年後、長野で折り合いの悪かった上司が、直属の上司として赴任してきました。長野では、私の後任が半年で会社を辞め、その次の後任もまた半年で退社してい

ました。再び憂鬱な日々が始まりました。祈ることはできましたが、今思えば、ただ、「ああしてほしい」、「こうなってほしい」と、イエス様に命令するような内容でした。逃げることだけを祈っていたように思います。自分では一生懸命、精一杯祈ってはいましたが、「みこころがなるように」とは祈れませんでした。聞かれる祈りではなかったと、後になって思わされました。

イエス様は、私を愛してくださっていて、私のすべてをご存じです。だからご計画を持って導いていてくださるとは、その時は受け取れませんでした。だから、苦しかったのだと思います。家内からは「お父さん、ヨルダン川に足を入れるのよ」、「自分を明け渡しなさいよ」と言われましたが、川に足を入れることも、明け渡すことも、言葉ではわかるのですが、実際にどうすればそれができるのかわかりませんでした。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

（マタイ　6・31〜34）

「心配するのはやめなさい」というみことばを受けて、うれしくなりました。私は、すぐ、どうしよう、どうなるのだろうと思い悩む者で、すぐに心配してしまう者だからです。心配しても何の解決にもならず、何の益にもならないと思わされました。その上司の下で、二年間、苦しみの日々でしたが、東京での四年が過ぎ大宮へ異動となり、その上司から離れることになりました。しかし大宮での二年が過ぎた時、その上司は四ヶ所の営業所の統括部長として、大宮に机を置くこととなり、また顔を合わせることとなりました。直接の上司ではありませんでしたが、顔が合うと不愉快なことを言われたりして、「イエス様、三回もですか」とつぶやいていました。

私は、イエス様が「わたしに頼りなさい。私がするよ」と言われているのに、頼ろうとしない者でした。主は、「しっかり立って頼りなさい」と、この上司を三回も私の近くに置いてくださったのだと、後々に思えるようになりました。

今は、この上司の救いも祈れるようにしてくださいました。この上司が与えられなかったら、集会には集っていなかったと思います。この上司が大宮に赴任してきた二年後に、私は最後の勤務地である池袋に転勤になり、四年後の二〇〇〇年に定年退職しました。この上司も子会社に異動していきました。定年になり会社から解放され、礼拝や家庭集会、キャンプにと家内と共に集えるようになりました。

一九八九年十二月二十四日、家内と共に吉祥寺集会所でバプテスマを受けました。二〇〇二年、「メッセージ当番表にあなたの名前が載っている」とある姉妹から言われました。私はそれまで、当番表があることすら知りませんでした。同姓同名の兄弟ではないかと思っていたら、「あなたよ」と言われびっくりしました。こんなことが、現実に起こるとは夢にも思っていませんでした。自分は、文章は書けないし、人前で話すこともできない者だとわかっていたからです。

モーセは主に申し上げた。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」

（出エジプト　4・10）

私は、モーセのこのことばの通りの者です。メッセージのできる器ではないことは自分が一番よく知っていますし、家内も私ができないことはよく知っていますから、家内からは「よく祈ってやってください」と言われました。従うことは主の祝福にあずかることに繋がるのかなと思わされ、マイクの前に立つ決心も与えられました。しかし、メッセージ原稿を作ることが一番の苦しみでした。このことも訓練だと思わされ、

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇　103・1～2）

イエス様は、こんな者のためにもご計画をもって導いてくださっていた、と感謝に絶えません。会社を五回も変わりましたが、最後の会社で定年退職まで働かせていただいたこと。家内と結婚できたこと。息子、娘、二人の子供が与えられたこと、そして、家族四人が救いの恵みにあずかっていることなど、本当に感謝です。

私たちは社宅扱いのマンションに住んでいましたので、定年を迎えるにあたり、「私たちはどこに住めばいいのですか」と祈っていました。定年五ヶ月前に、住んでいたマンションの一室が持ち家として与えられました。主は本当に良くしてくださって、祝福の中に置いてくださり、感謝でいっぱいです。

「成してください」と祈るしかありませんでした。真実であるみことばだけを受け取っていただきたいと祈りつつ、メッセージをさせていただいていました。今は、メッセージから解放されています。

兄弟姉妹の中には、いつ救われたかをはっきりと知っておられる方が多くおられますが、私はそれがいつだったか、はっきりとはわかっていません。イエス様は、だんだんと心の内に入ってくださいました。兄弟方の礼拝の祈りを通して、人間は生まれながらにして罪人であること、神様から離れていて神様を知らないことが罪であること、私の身代わりとなられて十字架で流された血によって罪赦されたこと、葬られて三日目によみがえられたこと、天に上られまた迎えに来てくださることなどがはっきりと心の内に入ってきました。また、悔い改めることがどんなに大切なことかも教えられ、新しい命で生かされていることも感謝できるようにしていただいています。メッセージをするようになった頃にヨルダン川に一歩足を踏み入れ、救いの確信をも与えられた時だったのかなと思っています。

上田勝巳／一九四〇年三月三十日　三重県宇治山田市（現・伊勢市）で四男五女の四男として誕生
宇治山田商業工業高等学校、商業科、一九五八年卒業
東リ株式会社、二〇〇〇年定年退社
現住所　埼玉県さいたま市浦和区
妻・康代　長男・典広　長女・容子

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

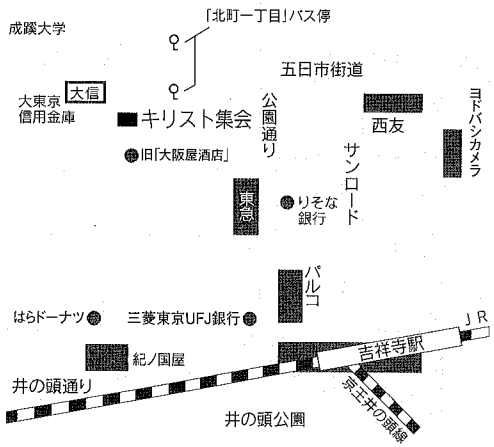
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

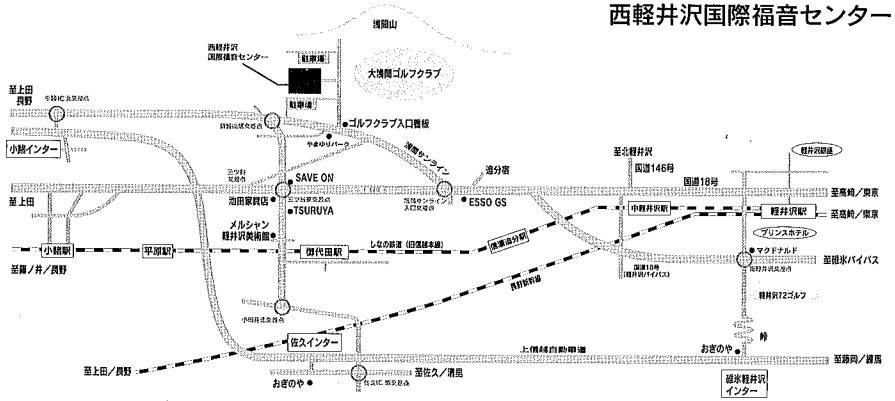
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会　10:00 / 18:30

火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話]　0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話]　0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

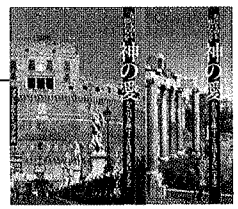


ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

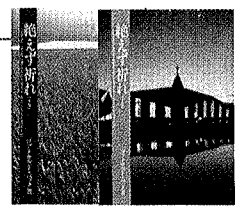
なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ (上・下巻)



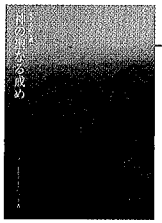
ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会

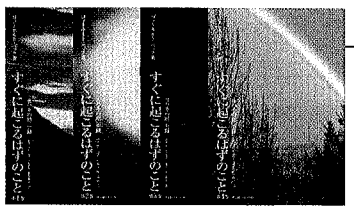
モーセの十戒　神の聖なる戒め



ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

すぐに起こるはずのこと−ヨハネの黙示録 (第1〜4巻)



ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。

光よあれ −私たちは主のもの証しシリーズ (第1〜9集)



いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第31号

定価100円（本体95円）2014年1月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子　久田倫子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

